

佛教和讚三百題

016091-001-4

特61-17

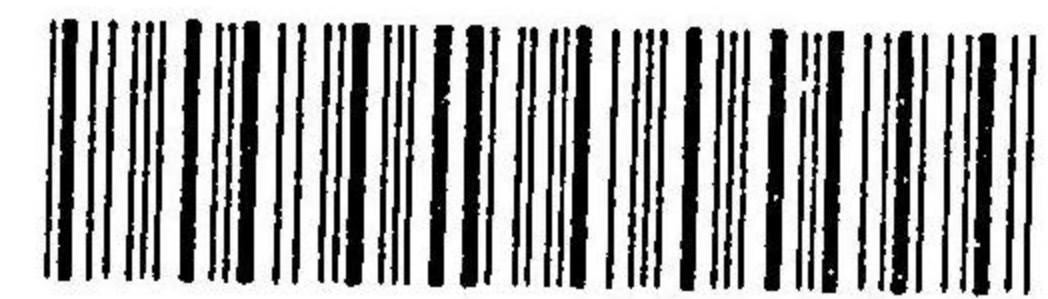
佛教和讚三百題

伊東 洋二郎 / 著

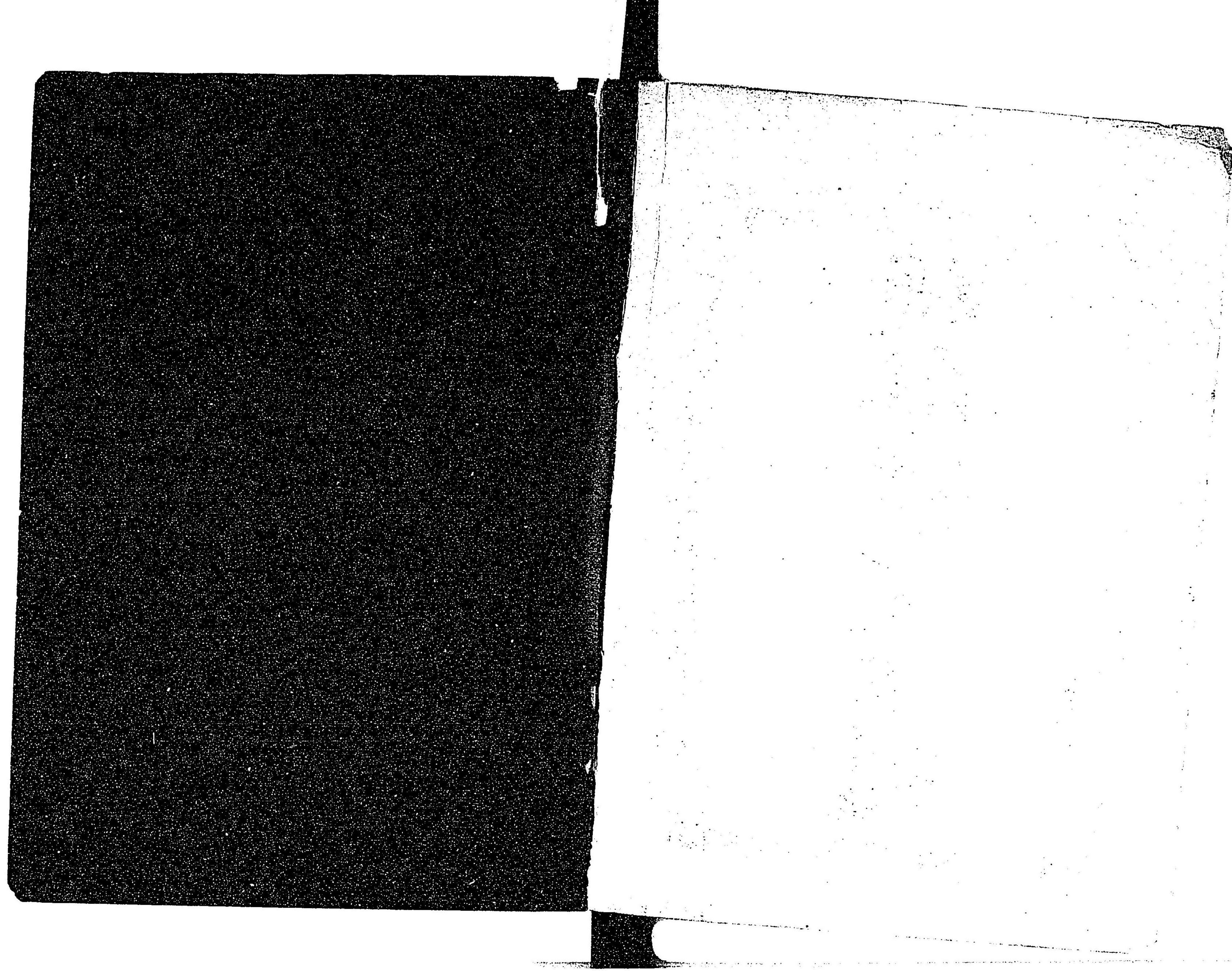
仏

M26.12

ABC-1939



特6

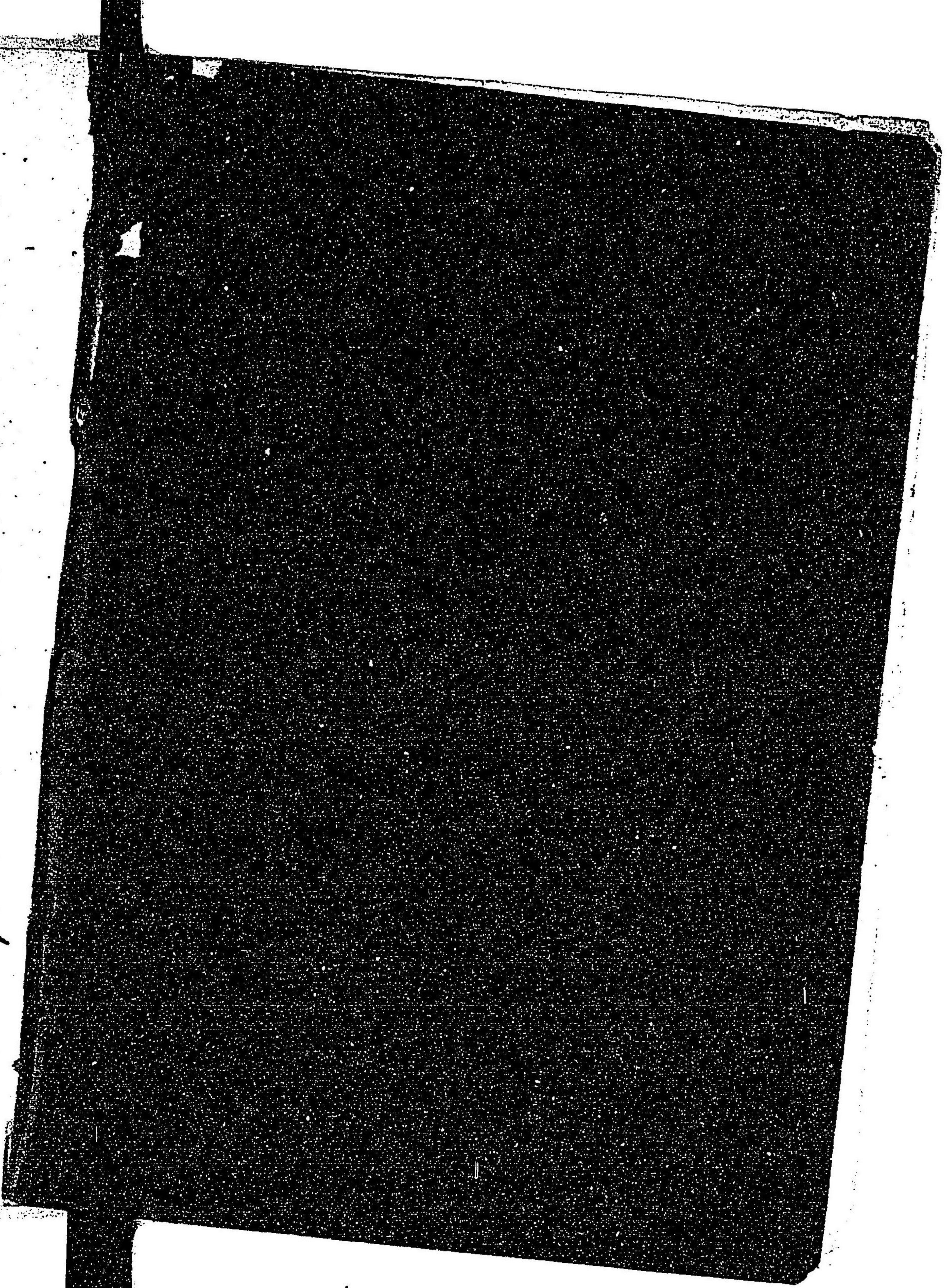
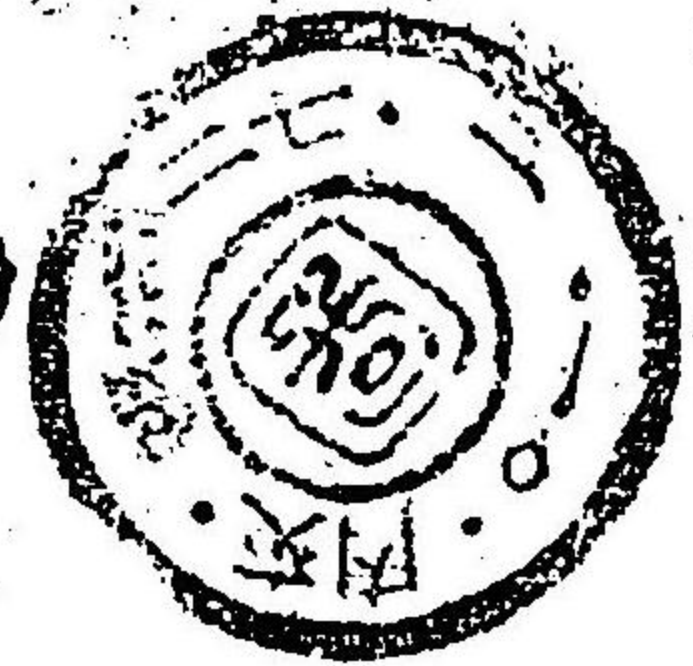


特 61

17



Large, bold, black calligraphic characters, likely a signature or title, written vertically.



和讃
平

○和讃三百題序

秋高く馬肥えたり燈火又親むべきの候と謂はん
乎、偶々東尾書房主人、余が茅屋を訪ひ來りて頃日
某子をして編纂せしめし所の和讃三百題の草稿
を出し余に序せんことを需めらる、爰に於て余の
主人に謂ふて曰く君の年來佛書を發行し善く賣
り善く刊する所謂商畧と鑒識力とい其特有にし
て佛教書肆社會中に自ら一頭地を出せりと誇る
にあらずや、然るに這般の稿の覆醬の料たるに過
ぎず若し今之を發行するとせば、其平生の鑒識力

と商略とに背反するの嫌ひなからんや君何ぞ少
しく顧みざる。と主人服せず反抗して曰く牛溲馬
勃敗鼓の皮も取りて以て事を利し物を益するの
佛祖の報権方便なり覆醬の稿の故を以て甌を覆
ふの予の爲すも忍びざる所なり且夫れ和讃の利
益より考査し來れば此稿必せしも覆醬の料もあ
らず先生此れを一讀して序を作らんことを乞ふ
と山海里の斷篇を出し『和讃引といふ事』の條を余
が前に指點す仍て余の其條を讀むに曰く
『舌へ叡山の慈覺大師唐土に渡り玉ひし時五台

山に登りて生身の文殊菩薩の授けに依りて極
樂淨土の八功德水の波の響きに自然の法音を
出せると大經に或聞佛聲或聞法聲或聞僧聲或
聞靜寂聲等と説き玉ひるが如くにて微妙不可
思議にましますを此娑婆界に傳へんとて彌陀
經と念佛とに七寶々池の柏子を寫して岸うつ
波の聲を引くことを習ひ玉へり之を引聲の彌陀
經引聲念佛と云ふ(中略)慈覺大師歸朝の船中も成
就如是功德莊嚴と云ふ所に到りて彼文殊菩薩
の教へられし一字の曲節を忘れ當惑の折彌陀

觀勢の三尊空中に出現し其文句の曲節に叶ふ
様に聲を引きて教へ玉ひて西空に歸り玉ひし
とぞ是より佛事勤行に聲を引くと傳りて念佛
に聲を引き和讃の節を附て三首引六首引とて
僧俗男女聲を引き々々て安樂國のいさぎよき
八功德池の波音の無漏の依果不思議なるを
思ひ浮べて念佛勤行の營みとする事なり云々
と余一讀過了して主人の企舉其大に謂れあるを
知り善哉善哉と稱揚しつゝ彼我の對話を記して
以て序に充ると云ふ

島春居士識

○凡 例

一本書を算修するに就き觀音、地藏、因果經和讃等の四五種を除く
の外、余が數年來篋底に藏め置きし古寫本、若くは各佛教雜誌上
に記載せるものの中より撰擇したるものなり、其各佛教雜誌上
に記載せしもの一々該發行所より照會して許諾を得たり、且尙ほ西
陲及北海道等の遠隔地に在る知友等にも照會して投寄を求めし
ものもあれど、余が此書纂修の辛勞を以て其尋常ならざりし事を察
すべし

一本書中に採擇せし和讃中、其古人の作と今人の作とに拘はらず一
句一章、若くは全篇に付き唱ひ難く讀み易からざる所の、余が已
むを得ず鏤彫飾刻せし所あれど、或は金什玉作を傷けしやも亦知
る可らず、大方の原作者乞ふ咎め玉ふな

一佛教大家の手腕に成る新体詩、長歌等の所謂出世間文學上の趣味
を發揮するの効あるのみならず佛教の教理を揮推するに最も其著

き効あるを信ず、故に其新体詩、長歌等も亦た此書中に撰擇せり
 一書中披見に便ならん事を計り佛菩薩、經論釋、高僧碩德、安心修
 行、四恩十善、雜の五部も別ちて類修する所あり讀者之を點首せ
 よ
 一本書の初め和讃一万首を總集し和讃一万集と題する心算なりしが、
 發行書肆の請求急なるに依り今僅に三百首を以て一集とせり、餘
 の漸を以て蒐集し遞次一万の數も充さんとす、若し夫れ大方の諸
 君本書を繕きて其洩れ居る發行書肆へ向け、惠送を賜はらば誠
 幸甚なり
 一此書中に掲載せる一章若くは幾章を拔萃し（施本等の爲め）轉載
 せんと欲せらるゝ時の一應發行者へ照會あるべし、否らされば版
 權の苦狀起らんも亦未だ知る可らず、注意の爲め特に一言を添ふ

編輯者識

和讃二百題 佛の卷目錄

●佛菩薩の部	
○四位和讃……………	二頁
○涅槃和讃(二月十五日)……………	七頁
○涅槃……………(異本)……………	九頁
○涅槃……………(異本)……………	一一頁
○滅後……………(光輝の一閃)……………	一八頁
○茶毘……………(涅槃會)……………	一九頁
○八相……………	二〇頁
○佛光……………(何佛仙)……………	二五頁
○釋伽……………	二五頁
○釋伽……………(社會ノ光明)……………	二七頁
○十二光佛和讃……………	三二頁
○山山釋伽……………(畫像贊)……………	三二頁
○佛陀光榮(ウエサツク)……………	三三頁
○釋伽一代いろは……………(歌ノ歌)……………	三七頁
○釋迦彌陀恩德……………	四〇頁
○全(異本)……………	四二頁
○全(異本)……………	四七頁
○阿彌陀……………	五〇頁
●經論釋の部	
○全(異本)……………	五四頁
○摩耶夫人……………(アシアの輝)……………	五四頁
○舍利和讃……………	五五頁
○廿五菩薩……………	五八頁
○文殊……………	六〇頁
○觀音……………	六〇頁
○那智觀音……………	六五頁
○地藏尊……………	六六頁
○全(異本)……………	六六頁
○不動明王……………	六九頁
○歡喜天……………	七二頁
○金比羅神將……………	七五頁
○毘沙門……………	八〇頁
○達摩……………(妓女と達摩)……………	八三頁
○全(異本)……………(不伽翁)……………	八五頁
○羅漢……………	八五頁
○遺闕……………	八六頁
○因果經……………	八八頁
○因果經……………	八九頁

○女人成佛血盆經	九一頁
○血盆經異本	九三頁
○孟蘭盆經	九五頁
○光明真言	九七頁
○淨土門 (淨土の心)	九九頁
○密宗教理 (理を讀む)	一〇一頁
○密宗哲理 (五色の光)	一〇二頁
○淨土 (淨土教)	一〇四頁
○唯識 (唯識)	一〇五頁
○大乘十報 (法の御山)	一〇七頁
○觀法 (法の御山)	一〇七頁
○西藏佛教	一〇七頁
○高僧碩徳の部	一〇八頁
○聖徳太子	一〇九頁
○天台大師	一一二頁
○傳教大師	一一九頁
○慈覺大師	一一九頁
○弘法大師	一二七頁
○全山開 (法の初音)	一二九頁

○全いるは	一三二頁
○全即身成佛	一三五頁
○全 (日本の寶)	一三八頁
○善導大師	一四八頁
○圓光大師	一五〇頁
○聖谷上人	一五九頁
○餘興 天理教のオムケター	一六〇頁

和讚二百題 佛の卷目錄畢

佛教和讚三百題 (佛之卷)

●開經偈 (和讚唱稱の初めに一度口唱すべし)

無上甚深微妙法、百千萬劫難遭遇、我今見聞得受持、願解如來真實義、

●懺悔文 (次に一度)

我昔所造諸惡業、皆由無始貪瞋癡、從身語意之所生、一切我今皆懺悔、

●三歸戒 (次に一度但し多少隨意)

南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧、南無歸依佛兩足尊、歸依法離欲尊、

歸依僧和合尊、歸依佛竟、歸依法竟、歸依僧竟、

●回向 (終りに一度口唱すべし)

願以此功德、普及於一切、我等與衆生、皆共成佛道、十方三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若般羅密、

●因位和讃

歸命頂禮釋迦如來
 利生の行ぞ有難き
 人壽百歳なりし時
 其時陶師の御身に
 佛名眷屬時處
 大誓願を立たまふ
 無數の劫を経給ふを
 出世成道あらせしが
 其より然燈佛迄を
 佛の出世も値給ふ
 初發心より慈悲深く
 因位の修行を原るよ
 此南洲一佛あり
 佛所も詣でし法を聞
 弟子の名迄も悉とく
 其より厨那尸棄佛の
 初阿僧祇と申なり
 在世法中無法の世
 第二の僧祇と申なり
 然燈如來の三會に
 身命財をかへりみず
 三無數劫過去の世の
 釋迦牟尼佛と申たり
 吾當來に作佛して
 今の世尊も變らじと
 世に出給ふ時までよ
 此間に七萬五千佛
 修行精進斷間なし
 此間に七萬六千度
 善惠仙の御身もて

無量の大衆の其中に
 第三僧祇と申すなり
 是迄三大阿僧祇の
 六度の行を修し給ふ
 意も言も及ばれず
 鹿野苑よぞ栖たまひ
 其慈悲心を感じつゝ
 仁心深ぞ成られける
 皆諸共に慈悲深く
 帝釋飢人と化し來り
 猿も狐もそれくよ
 作佛の授記を受給ふ
 此間に七萬七千度
 大慈大悲の弘誓もて
 其行相を原ぬるに
 身の毛も寒堅計なり
 孕める鹿も代らせて
 王も諸臣も諸共よ
 兎と生れたまふ時
 最睡じく棲たまふ
 頭に食物乞ひるれば
 草薺木菓をとり來り
 其より毘婆尸佛迄を
 佛の出世に値たまふ
 利益衆生を專ばらに
 難行苦行の有様の
 或時鹿の身となりて
 王の厨もゆき玉ふ
 殺生せしを後悔し
 猿と狐と同居して
 其慈悲試みんためよ
 各々求に行にける
 其儘前も進むれ

飢人の喜び食しけり
 柴や落葉を抓寄て
 飢を凌がせ給れど
 帝釋本身顯りして
 切利天へぞ歸らるる
 帝釋鷹と身を變じ
 袖も飛入り隠れける
 王乃理に伏し
 鷹にぞ與へ給ひける
 命も絶んとする時
 天の薬を進むれば
 兎の空しく立かへり
 其上に身を横たへり
 言さぬ計り仕形して
 其慈悲心を感じらね
 尸毘王たりし御時
 一羽の鳩を逐來れば
 鷹のたちまち言して
 御身の肉を剗屠
 御身の肉の盡るまで
 鷹は本形あらりして
 苦痛も肉も一時に
 哀み涙を垂れながら
 急ぎ炙りて食せられ
 目を閉塞で臥にけり
 菩薩心とぞ讚嘆し
 慈悲深さを知んとて
 其鳩王の御衣の
 王に向て議論せり
 鳩の重さよ懸くらべ
 鳩の懸目の重けれ
 大慈大悲を讚しつゝ
 忽ち快復したまへり

或時無法の世も生れ
 求給うぞありかたき
 實も法を慕ひなげ
 血を絞ての墨にかへ
 行者の勇み喜んで
 金剛勇猛の信力を
 行者の大に悲泣して
 命は程なく絶ぬへし
 御法を説かせ給れど
 光を放て出現し
 甘露法味も遇ぬれば
 出離の法を聞んとて
 天魔佛と化し來り
 我語の如く致すべし
 骨を碎て筆として
 教の如く爲給ふよ
 天魔の恐れ驚きて
 我信心の足らざるか
 南無十方の大悲尊
 天を仰いで哭給ふ
 無上の妙法説せつゝ
 心中歡喜し踊躍して
 諸國の野山を經歷し
 行者に向て言ける
 身の皮剝で紙となし
 吾語を書付記すべし
 苦痛を厭ふ色もなく
 忽其塲を逃さりぬ
 見捨て何國へ去給ふ
 唯哀憐を垂れ給ひ
 時も眞の佛世尊
 行者を讚歎し給へり
 皮骨惣身平癒あり

其より精進し給ひぬ
 深山路も入らせつゝ
 後の半偈を聴んため
 放身捨命したまへり
 身命財寶打捨て
 夜晝坐禪をし給ふに
 枯木の思を成ける歎
 卵を産こそ希代なれ
 親鳥怖れて来らじと
 弗砂如來の御所にて
 隻足立して居給へり

雪山童子の御時も
 諸行無常四句の偈の
 險しき巖の溪底の
 此外生々世々の中
 難行苦行は限なし
 身心不動も成せられ
 鶉怖るゝこゝろなく
 斯ぞと知し召てより
 息音だにもし給はず
 七日七夜をこたらず
 天下の人を哀憐し

法を求て遍歴し
 半偈の聲を聞給ひ
 夜叉の言に隨ひて
 菩提の道を聞んとて
 或時樹下に身を倚て
 出入息音なかりけり
 頭髮を其儘集と爲て
 此身少しも動さなり
 子鳥を巢起せ給ける
 功德を讚歎し給ひて
 寶の珠を得んため

四海の水を盡さんと
 諸天善神感歎し
 精進力の強くして
 無價の寶珠を進ける
 五體節々支解せしめ
 利他の誓願限りなし
 其後九十一劫は
 補處御弟子と成らる

● 涅槃和讃 (二月十五日) 佛子優婆塞東清松入道乘貫沙彌
 是今霄をは能く思へ
 娑羅双樹なる鶴林で

一心勇猛も汲み給ふ
 いでや汲んど諸共よ
 海水少し減すれば
 忍辱仙の御時も
 少も瞋恨なかりけり
 難行苦行の其の程は
 自行専修し給まひ

慈悲精進の御意を
 晝夜力を盡くさるゝ
 龍神恐れ泣きて
 歌利王劍を振擧て
 三阿僧祇のその間
 多劫を経も宣がたし
 迦葉如來の御時に

大聖世尊の御涅槃の
 金剛法座の床に臥し
 三千年の其昔し
 頭北面西右脇にて

諸行無常の機を現し
 百萬億の佛弟子の
 今や常なき風誘ひ
 寂滅爲樂の都へと
 月諸共々西へ入る
 涙の雨も袖しぼり
 神聖眞理の親玉の
 (以上四句三度うたひ返せ)
 彌陀日の出逢ぬれば
 口に出まゝを書列ね
 易行淨土の大道を

鶴の林も枯々に
 目もくれ心も消果て
 大恩教主釋迦如來
 飯らせ玉ふの二月の
 正像二時の過去れり
 悲み歎く事なれや
 教主世尊の御金言を
 これ今日能く思へ
 泣ひた眼を拭ひつゝ
 歌ひ喜こぶ言の葉の
 代末濁世の我人の

頼すくなく見にける
 是生滅法の春の花
 生滅々巳の儀を示し
 中半の空の有明の
 末世の遺弟悲泣して
 飯命頂禮大悲なる
 信仰しての讚美せよ
 釋迦御月の隠れても
 拙き筆をかへりみず
 轉迷開悟の一門の
 只一筋に彌陀佛の

超世の悲願を頼らん
 救のんと誓玉ひける
 云何六道を迷いんと
 抜て出られぬ有難さ
 飛立計りに踊りてぬ
 幼なき子供の母親を
 飯命頂禮大悲なる
 不可思議尊讚美せよ

云何罪咎深くとも
 光明攝取の懐ころへ
 思ふ心の御佛けの
 余り嬉しき身に溢れ
 口に現南無阿彌陀佛
 呼か如くも遠慮なく
 彌陀佛智を信すれば
 (此四句も亦三度うたひ返せ)

佛の大慈大悲にて
 攝取られし身の上
 不捨の誓約に與りて
 手の舞ひ足の踏む所
 佛の御名を稱ふるの
 戀しく思ひ喜こひぬ
 迷ひか轉じて悟との

● 涅槃和讚 (異本)

如來化導事をへて
 長夜の闇そいと深さ

娑羅林樹に隠れしよ
 阿難の七夢を顯して

衆生の明眼消いて
 生死の苦相現前す

乞願くは無上尊
佛法僧に逢かたし
如來在世の當初わ
解脱の宮よて遊ける
廣大慈悲の利益も
佛の月輪かたもなく
僧伽梨衣を脱すて
八十種好かくれなき
佛語に隨ひ修行して
未來わ未來遙かなり
我等生死の凡夫よて

我等を捨る事なけれ
釋尊大利を施して
人天大會ことごとく
我等其時しらさりさ
漏ては獨り留るらん
生死如何る里なれば
紫磨の色身見しより
恨めしき哉我こころ
大利得事なかりけん
現在勵むことなくば
一句一偈の縁あれど

冥より冥よ入ぬれば
今度苦しみ拔たまへ
生死の牢獄捨はてし
如何なる惡趣に沈か
罪業如何る雲なれば
如來住事なかるらむ
三千界の地の上に
何爲過去の佛世にて
過去過去とて倍過ぬ
生死の出期なかる可
解脱の道を隔てつ

却て三途に入ぬべし
未だ發心せされども
壽盡の時に至るには
今はかへりて願樂し
彌陀聖化よ漏さらん
衆生有感無不應
● 混槃和讃 (異本)

但し心よ頼むべし
菩薩種姓に定まりぬ
佛みづから現前し
これを死生の終とし
如來涅槃諸功德
究竟令得大菩提

釋迦の名號聞つれば
釋迦の讚嘆聞く人わ
淨土の道を教ける
安養界よ往生し
甚深廣大不可量
兼但对帶諸法門
五十二類啼泣等
心をしづめて往昔の
難化の衆生を誘きて

歸命頂禮釋迦尊
乃至八萬權實教
我等が心を哀れみて
儀式を思ふぞ哀なる

十方恒沙諸世尊
菩薩聲聞諸大衆
所作の功德を増玉へ
如來五濁に出たまふ

難化の衆生を誘きて

機縁薪つさぬれば
 沙羅雙樹の下よして
 時に人天悲歎して
 我は長夜を如何せん
 法界等流の教法は
 常在靈山なるべしと
 狗尸那城に充滿て
 心と思ひ口にいはく
 かねて別れを思にぞ
 三十二相を見ことも
 漏刻しつゝおし移り

漸く滅を告げたまふ
 紫金の装のぢさなく
 佛よ白して言さく
 如來大衆に告たまふ
 生死の長夜を照へし
 漸く初夜なりしかば
 十二由旬猶せばし
 我等が宿縁深して
 宿縁かへりて恨なる
 今夜を限と思ふにぞ
 漸く中夜に成しかば

跋提河の西の岸
 頭北面西したまへり
 如來滅したまひなば
 我こそ滅を唱ふとも
 滅度を悲ことなかれ
 萬億恒沙の諸大衆
 大衆各かなしみて
 佛よ相るを悦びて
 梵音聲を聞くことも
 涙へだてゝ物みえす
 如來床より立たまふ

普く大衆みそなはし
 跋提雙樹よ充ち滿る
 種種御法を説つれど
 紫金の胸を顯りして
 最後我身を見べしと
 目暫らくも不捨して
 一會の心の呉にける
 自から金の棺よ入り
 右の御手をしき玉ふ
 即はち眠が如くして
 とさよ廬頭大尊者

青蓮華の眼こより
 衆會に告げて言はく
 末代惡世の衆生の
 重て大衆よ告たまふ
 大衆涙をおさへつゝ
 最後の装ひ拜見し
 爾の時世尊順逆に
 滅盡三昧修したまふ
 青蓮華のまなこどち
 終に入滅したまひぬ
 悲歎の聲をわけつゝ

慈悲の涙を流しつゝ
 我世み出て化しめて
 不信の身こそ悲けれ
 汝等心をさめつゝ
 合掌恭敬尊重し
 今を限りと思ふにぞ
 超越三昧したまへり
 面を西にむかへつゝ
 面門光り衰ゐへて
 釋迦念佛
 十二由旬よ充滿てる

衆會に告げて悲ましく
 大衆尊者の聲を聞き
 佛の御前に消え入ぬ
 或の衣をさきすてし
 大地も倒る人もあり
 或のたぶさを抜捨て
 坐禪の床の如くなり
 或の自ら手をまぎり
 或の泣々野邊も出で
 則はち母に別れたる
 死たるもの、如くなり

大覺世尊の只だ今ぞ
 各各大地に倒れ臥す
 或は大河も身なげて
 威儀を忘る人もあり
 或ひは聲をあげつし
 虚空に投る人もあり
 或ひの涙も不落して
 合掌踟躕の如くなり
 羅睺羅の佛の後みて
 幼きもの、如くなり
 六恒河沙の國王の

こと切れて玉ひぬと
 或ひの金の棺を見て
 波も交はる人もあり
 或の手も手を合つし
 佛をよばふ人もあり
 或ひの聲も不出して
 醉る者のごとくなり
 或の叫ひて山も入り
 解脱の袂を絞ること
 阿難尊者の地に伏て
 國の位をわすれにさ

七恒河沙の夫人の
 亂波の雨も勝たり、
 二月十五の夜のくも
 青蓮咲を止みたまふ
 生死如何る里なれば
 大地も色こそ變けれ
 説置たまひし教法の
 見奉つるが如くなり
 悪象師子の強きもの
 生者必死を唱へつし
 祇園の鐘も今さらよ

金のたまさを抜捨て
 天帝釋の叫ぶこと
 月の御影をたち隠す
 悪業如何る雲なれば
 如來の住事無るらん
 また早晩のと思にぞ
 耳の底にて忘られず
 虎狼毒蛇も花喰はへ
 人を誤まつ事ぞなき
 沙羅雙樹の風のこそ
 諸行無常と響かせり

大梵王のなくなみだ
 雷霆響へも猶たらず
 沙羅雙樹の木の下も
 佛の月輪かくすらん
 五十二類の泪だよ
 待れぬ月日の浮ける
 拜みし四八の相好の
 人を舐りて悲しめり
 跋提河のなみのおと
 會者定離を調ふなり
 無常ことを思ふよぞ

實とに是生滅法なる
すなわち轉輪聖王の
金棺自から入り玉ふ
其火即はち消りてし
薪に投るに尙さえぬ
迦葉尊者の山をでし
佛の如何にと問玉ふ
迦葉の五百御弟子と
泣々狗尸那國に入る
迦葉の衆會の中を分
最後の姿を見せ玉ふ

佛の生滅滅己して
闍維の法に准らへて
大衆各各火をもちて
更につく事無りけり
次に龍火を放てども
來けるをぞ待たまふ
人人泪たを流しつし
聲を擧てぞ叫びける
大衆迦葉の入を見て
金棺にぞちかづきし
須臾の間を経て後よ

寂滅爲樂を證し玉ふ
牛頭栴檀の香木に
栴檀薪にすしむれど
次さに諸天火を持て
龍火も又こそ消けれ
尊者の道よ人ごとに
佛の既にと答へけり
慇か道にも不消して
みな又叫ぶぞ哀なる
佛迦葉をあわれみて
本の棺よぞ入り玉ふ

迦葉佛を拜みつす
大悲不能特留我
時に力士火を持て
ささの如く消けり
中より慈悲の火出し
茶毘の烟りは空に滿
遂も間こそ無りける
分布諸舍利……
五天竺よぞ尊めける
漸く星霜經しはどに
一夜の夢よぞ成ける

泣々偈をぞ唱へける
令我 不見佛涅槃
牛頭栴檀に移せしに
南無釋迦牟尼佛
漸やく薪も移してぞ
衆會の涙は地も流る
佛此夜滅度……
而起無量塔……
或ひは忉利の雲の上
跡さびしくぞ成に是
迦葉尊者は鷄足に

世尊滅度一何速
蒙發一言相教告
烟すなはち絶はてし
終ひに佛の御胸の
七日七夜も焼たまふ
七日七夜叫けぶこゑ
如薪盡火滅……
後には舍利を分つし
或ひは龍宮の浪の下
恒沙の聖衆も散果て
袈裟を捧げて入定す

阿難尊者は身を投て
御法と共に隠れにき
我等五濁よ生を得て
思へば悲歎限りなし
我等が心を鑿みつゝ
一供結縁者……

●滅後和讃

幾萬年のその昔し
我こそ佛陀の其時よ
我窩の畔よ餌食せる
夜のまた星を戴きて

(光輝の一閃)

ヒマラヤ山の深林を
草の中よぞ伏つゝも
獸の群を縁なる
人と鹿との踏たりし

尚那和修の賢さまも
前に滅度をとげ玉ふ
聖教に合ひ舍利も値
五十二類啼泣等
願具諸衆生……
往生安樂國……

さすらひ回る虎有き
死よ近くを知きて
かゝやく眼もと鏡き
道をば嗅ぎて殘墟に

飽をも知らで求けり
美妙の牝虎居ければ
牡虎皮のヤソダラの
黄金色にを輝ける
牡虎の終始我くの
今こそ思ひ出したれ
敵をば越て吼つゝも
互ひよ思ひ思はれつ
生死の輪こそ休なく

●茶毘和讃

鶴林雙樹の春のそら

(涅槃會)

二月十五日曉つさに

聲光あまねく十方の

我仲間なる獸のらの
牡虎のすぐに一場の
被りしものゝ其如く
牙と爪との争をひの
戀に流せし血の川を
牝虎の終に我に添ひ
艶く足もてうね立る
いと傲りげよ歩つゝ
卑さ高さも廻るささ

森の中にて第一の
争ひをこそ始めけれ
黒地色にて繡とりつ
彌々激く成りけるが
打ち守てぞ居たり梟
我倒たるそれこれの
わが太腹を撫さすり
共よ廣野よ出にけり

五十二類を驚ろかす
 大梵迦陵の御聲にて
 汝等かなしむ事勿れ
 大衆心ろを一つにて
 愍重恭敬いたすべし
 夜叉羅刹の喘息の
 淨妙細塵まどひつゝ
 妙高樓を莊嚴し
 如來の身を茶里す
 三十二相の妙体は

● 八相和讃

如來大會の中にして
 最後の法門とま玉ふ
 戒定智慧を修學せが
 最後の相好禮ひべし
 天龍八部の愁涙の
 虚空に満て風となる
 阿難羅漢もろとも
 聖棺これを捧げおく
 七日七夜ふるはごに
 無餘の煙と登りよさ

相好色身いつくしく
 我今涅槃に入ぬとも
 在世に異なる事あらじ
 目暫くもすてずして
 大地に流て川となり
 即ち紫磨の色身に
 金棺よこそ納めけれ
 栴檀香をつみさとし
 闍維のたさく皆盡ぬ

歸命頂禮釋迦如來
 如來の付屬を受給ひ
 日夜御法を説せしが
 下生の期運至りぬと
 白き象にぞ騎給ひ
 生天下天と申すなり
 丑の七月十五日
 簾の内なる摩耶夫人
 右の脇より入せると
 其後深き所以ありて
 臆て全快あらせるを

迦葉如來の御所にて
 其より兜率に生天し
 下界の衆生を觀給ふ
 五種の光端現じつゝ
 九十九億の諸天衆と
 周の第四主昭王の
 中天竺の迦毘羅國
 假寢し給ふ御夢に
 髓に御覽ましゝて
 難治の病よ臥給ふ
 是託胎とまうすなり

善惠菩薩と申せしが
 諸天大衆を教化して
 根機も漸く熟すれば
 大日輪の相と化し
 同じく下り給へるを
 二十五年癸の
 淨飯王の奥御殿
 日輪象に騎らせつゝ
 懷妊し給ふ心ろあり
 諸天擁護の方にや
 明れの甲寅の年

卯月八日の吉日に
花の下にぞ出遊び
天子誕生ましませり
空より香湯灌ぎけり
天上天下獨尊と
三十二相の御身よて
六七歳の時分より
父王是を厭ひせて
歌舞姪樂又媚させて
御年十九の花の春
是を出家と申すなり

御庭景色も時めけば
一枝折んとし給へば
蓮華俄も涌出て
其時七足歩ませて
妙なる御聲又演給ふ
技藝天文地理までも
世間の無常を感つゝ
妃を迎へ其うへに
志願を遮り給へども
健歩駒に打騎せ
跋伽の林又著給ひ

數多宮女を召具して
右の脇より忽ち
天子の御身を承捧げ
大光明を放ちつゝ
是出胎とまらすなり
學を自然と知しめす
出家の御志願切なり
五百の美女を撰寄
五欲榮花に意なく
夜半に城を踰え給ふ
自髮を剃らせつゝ

阿羅邏伽蘭と論義而
暑さ寒さの厭ひなく
成道せんとし給ふに
共よ來て障礙せり
残らず退き散にけり
草葉や天衣を敷つゝ
癸未のその冬の
迷の雲の盡いて
種々の妙相備われば
忽ち影響したまひて
初め三七華嚴經

伽闍の麓に去給ひ
一麻一米食しつゝ
魔王の甚だ驚さて
言々調伏し給ふに
是を降魔と申すなり
金剛喻定に坐し給ひ
臘月八日の曉の
無上正等正覺を
盧遮那の御身と成給
華藏の莊嚴妙なるを
衆生の根機未熟にて

苦行樂行十二年
因位の御修行満足し
八萬四千の眷屬と
羣魔は力も盡はてし
菩薩樹王の其下に
周の穆王四年なる
明星出る其みぎり
圓に成就ましくて
他方恒沙の大菩薩
是成道と申すなり
啞や聲のでとくなり

其より阿含十二年
次に方等般若經
靈山虚空の三會にて
漏たる機縁を度とて
轉法輪とまうすなり
遺教經を説をばり
皆々悲み歎かる、
面西頭北に安臥して
五十二類も諸共に
苦空無常の音するを
金棺騰りて城にいり

一丈六の御身に
三十年にぞ説給ふ
出世の本懐遂んため
一日一夜涅槃經
七十九歳に成せける
滅度を示し給はん
其時佛性圓常の
大寂定にぞ歸し給ふ
哀み號んで悶絶し
入涅槃とい申すなり
種々の妙供を受給ひ

中下の根機を誘引し
所化の根機の調へば
法華經八年説給ひ
是まで五時の説教を
其春二月の十五夜に
大衆に御告有ければ
御法を熟々説給ひ
人天百億八部の衆
天地海山草木まで
以上の八相事をり
御身の中より三昧の

眞火自然と進り
天と地上と龍宮と
王舎城よて結集し
貴賤上下の隔なく

●佛光和尚讃(何私仙の語の讚美)エトウ井ンアーノルド博士述
幼き太子はわが君ぞ
藍薇の光色あしの紋
此君こそは佛陀なれ
助け給ふに究まれり

●釋迦和讃
敬禮天人大覺尊

七日七夜に焼給ひ
三所に佛事を成らる
天竺唐土我朝の
遍く利益を被れば

我等が伏て拜すべき
三十二相八十の
尊とさ法を説き示し

八斛四斗の舍利と化
三百餘會の説教を
島嶼迄も流通して
大恩教主と申すなり

君は正しく此御見ぞ
隨形好を見るときは
その法學ぶ諸人を

恒沙福智皆圓滿
因縁果滿成正覺

住壽凝然無去來
 善逝恒為妙法船
 念々不捨天人師
 靈山釋迦形妙尊
 在々處處聞法者
 我今所獻示如是
 非滅現滅俱尸那城
 釋迦能忍世間度
 故我頂禮釋迦尊
 頭北面西右脇臥
 異類衆生示正道

衆生沒在生死海
 能截愛流到彼岸
 如影隨形不暫離
 金口所說法華經
 如彼往昔沙羅林
 當來頭得無上法
 常在靈山度衆生
 往來娑婆八千度
 俱尸那城拔提河
 二月十五夜半滅
 作不生死能引導

輪廻五趣無出期
 願於來世恒沙劫
 晝夜勤修於出離
 生々世々得值遇
 五十二類最俊供
 非生現生迦羅城
 故我頂禮釋迦尊
 衆生得益無數億
 在沙羅林雙樹下
 願我往生極樂界
 悉證無上菩提道

七日已前智死期

悟無生忍證十地

●釋迦和讃

(社會の光明)

石川 一郎 作

歸命頂禮釋迦如來

ヒヤラヤ山の南なる

其名は三界の大道師

此娑婆世界に出現し

愛憐慈惠を除かんと

あらゝからゝの二智識が

尋ね登る御すがたは

無音に開く有爲の行

臨命終時不顛倒

正念往生極樂界

三千余年の其の往昔

摩伽陀國こそ降誕の

世界の支配を主とる

三毒五慾に苦しむる

鷲の御山に入り相の

永くうき世の塵を避

金殿玉位を汚塵と視

車匿を伴に遁れ出で

東洋亞細亞の其内の

諸天は五の祥をなし

悉達太子の假り住居

我等衆生を救はんに

諸行無常を知しめし

世を隔てたる山間に

護りのかたき城門の

身の行すへを白雲の

昨日榮花は夢の世の
山は非常のわらひ顔
三十二相八十の
登ればかわる塵外に
聖仙はそれと氣を勵
上行上智の金剛心
忍のふ功德の貴さは
千歳を経る木の下に
迷いに悟りし明星は
諸天讚感の聲々は
視渡す春の眺めは

今日は悉達の一人旅
心ろありげの峯の雲
隨形さやけく輝きて
遇しは慕ふあらは仙
一鞭加へし呵責には
達して濟はん三界の
遮那金剛の四種の法
苦むす岩に端坐して
浮世の闇を拂ひけり
五天に響き亘りけり
昨は枯野の草や木も

溪間に流るゝ水静か
眞如の光り木の陰を
歩みも速やさ法の道
一見をどろく大導師
四支六骨を碎くるも
衆生を憐慈悲と智恵
心ろよ悟る照普比丘
十二ヶ年の長日月
大覺世尊此のとき
.....
若葉萌へ出で緑添い

たがいに競ふ色と艶
馬に鞭うち牛をひき
無心よ謠ふさと歌の
波またいよう浮萍や
梢へに巢くふ百禽の
茂の深さくさむらよ
「マンヨー」の枝に棲
人を欺さむく野干や
弱は強さの食となり
清き流れの音しづか
佛陀はマンブ樹下に

人の心を誘く野邊の
瘠せし山畑肥沃の地
興や有げの椰棕の間
「レモングラス」の生立て
囀つり歌たふ聲々は
甲蟲爬虫啼き啣たさ
鳥は長閑けき遊して
むじな狸は奔せ回り
こころ荒野の景況は
無心に響すしきは
工夫は凝て何時かに

婀娜な姿の花げしき
耨き耕しの農夫等が
潺々たる水の汀には
千歳を樂しむ花の色
友喚かわす符合かや
春を樂しむ短じか夢
語るが如き其の下に
禽獸虫魚貝類も
娑婆の世界の嘆しき
あわれ無常の夢の旅
臍になりて慾と我が

汚れも永く消へ果つ
 生滅々己の谷みづや
 心ろ導びく波羅那國
 跋利の邑よ着き玉ひ
 嫉みぞ深かき蠶人も
 四諦の法を説れける
 法の教への香はしさ
 罽もとむる旅からず
 法を縁にし宿せん
 一夜の宿りを求らる
 勝なひ行けば悠然と

峻き山を分け出でし
 寂滅爲樂の木風の
 野邊に生育つ民草の
 佛陀の光明輝やさて
 婦童へにいたるまで
 其の名も高さ鹿野苑
 恵みを遺し立ち玉ふ
 日は海原に春つきて
 優樓頻螺計を訪ひし
 優樓頻螺か邪智陷筭
 結跏趺坐の金剛体

衆生濟度の身の上に
 音そひいさし法性の
 迷いの蔓のふさぐ路
 力荒男のそまひども
 争そひ會ふ其の時に
 寂しき里に賑わひの
 摩訶國を過さられて
 あたり淋しき夕暮に
 社會を照釋迦無尼は
 毒龍すみし石室に
 災ひ吐きし毒龍の

焔は反りて身を燃し
 身から苦しむ毒龍の
 一見するより三伽葉
 衆生濟度を一すしに
 四十九年演説法
 衆生を導びく寶なり
 忍辱の行なさぞかち
 蜥蜴や蛇に同じけり
 互ひよ慈悲と忍辱の
 斯の身此まゝ幸福と
 無漏路の我の眼當り

焔は天を捲きけれと
 前さ世の科の贖いと
 我慢は折歸依をなす
 三世因果の理を示し
 八万四千の法門も
 もしや佛陀の教なる
 其の人類よ生を稟け
 三世を達觀する時
 厚き心を守りなば
 成さんが爲の佛なり
 今の往昔を慕はしや

泰然微笑の大導師
 憐れみ深かき法の道
 之れが如來の光なり
 阿耨菩提に達せんと
 五千余卷の經典も
 慈悲の心の無りせば
 慈悲忍辱の無りせば
 昨の我なり明日の人
 争ひことゝ絶てより
 有漏路を迷ふ人々の
 歸命頂禮釋迦世尊

●十二光佛和讃

(原本字接不明なり識者の校訂を待つ)

なむたいひ無量光
解脱光輪廻りいなし

なむ大ひむたい光
佛光少量に最第一

なむ大ひくわんき光
佛光能無明暗はらし給ふ

なむ大悲なんし光
神光差を離るし事情不可なむ大悲てう日月

なむ大ひふたん光
其光佛を除能量事無し

なむ大ひちちるくわう
光明一切時普照し給

なむ大ひるんりう光
道光明にして絶す

なむ大ひちちるくわう
光明一切時普照し給

なむ大ひるんりう光
道光明にして絶す

なむ大ひちちるくわう
光明一切時普照し給

なむ大ひるんりう光
道光明にして絶す

なむ大ひちちるくわう
光明一切時普照し給

なむ大ひるんりう光
道光明にして絶す

なむ大ひちちるくわう
光明一切時普照し給

なむ大ひるんりう光
道光明にして絶す

なむ大ひちちるくわう
光明一切時普照し給

なむ大ひるんりう光
道光明にして絶す

なむ大ひちちるくわう
光明一切時普照し給

なむ大ひるんりう光
道光明にして絶す

なむ大ひちちるくわう
光明一切時普照し給

●出山釋迦和讃

(出山の釋迦畫像の賛)

西有穆山禪師
三千年の其昔し

●佛陀光榮和讃

(ウエサツク日の讚美歌)

佛テスト新聞直譯

衆生濟度に御難儀を
聞ての安氣に眠れず

穢して居てえらい類
南無釋迦牟爾佛南無釋迦牟爾佛

われらの仰く大導師
讚美の聲は鳴響かん

摩耶女王を母と爲す
世尊威光を讚美せよ

斯シーロンの大祭日
高さ名譽の其日なり

被成事の身にまみりて
況て彼處の光りにて

道心なきは何とまわ
佛陀の光榮を歌へ人

實もや莊大の聖日や
佛の降世は今日成ぞ

所有る浮世の問題は
悉達太子が御佛の

圓満月の靈日そ
佛は涅槃も住るなり

幾ら末世の情僧でも
着も食のも伽藍まで

嘸や呆れて御坐せう
實に喜しき朝なれや

われらの仰く大導師
讚美の聲は鳴響かん

摩耶女王を母と爲す
世尊威光を讚美せよ

斯シーロンの大祭日
高さ名譽の其日なり

被成事の身にまみりて
況て彼處の光りにて

道心なきは何とまわ
佛陀の光榮を歌へ人

實もや莊大の聖日や
佛の降世は今日成ぞ

所有る浮世の問題は
悉達太子が御佛の

圓満月の靈日そ
佛は涅槃も住るなり

幾ら末世の情僧でも
着も食のも伽藍まで

嘸や呆れて御坐せう
實に喜しき朝なれや

われらの仰く大導師
讚美の聲は鳴響かん

摩耶女王を母と爲す
世尊威光を讚美せよ

朝日の光り汚點なく
佛陀の光榮を歌へ人
尊とさ威力顯はれて
光かり輝やく太陽が
われらの仰ぐ唯一の
世尊の金言も定りぬ
世尊も並らぶ大聖は
見の勇氣の猛士なり
われらの仰ぐ大導師
讚美の聲の鳴響かん
身と命とを犠牲にし

開ける百合の花青し
所有る廣ろき斯世界
魔軍を破ふる大勝者
佛陀の教主の最上位
世尊威光を讚美せよ
智慧の婆羅門數多く
絶て有事なかりける
斯る勇者をいまだ一度
佛陀の光榮を歌へ人
無量光壽の御教へを
吾等を救る慈心より

われらの仰ぐ大導師
讚美の歌は鳴響かん
無明の闇を破すと云
宇宙獨眞の教主なり
所有る浮世の問題は
世よ聖賢の名は在る
その溫柔は婦人にや
世界に見は何時なるぞ
所有る廣ろき斯の世界
吾等に傳るその以前
盡し玉へる難行苦行

謂も畏さこかよこそ
思への歡喜胸も充ち
世尊威光を讚美せよ
實に主の愛に報えん
障ゆるよ難き御佛の
われらが仰ぐ大導師
讚美の聲は響鳴かん
吾等の學ん主の眞理
愛するごとく正眞の
われらが仰ぐ唯一の
世尊の金言に定りぬ

吾等は負ひし煩腦の
竭仰瞻も銘いずなり
所有る浮世の問題の
云何なるを爲可ぞ
獨どり全智の蓮臺の
佛陀の光榮を歌へ人
吾等の持たん戒行を
佛けの教への四聖諦
光りよ人を招かんと
世尊威光を讚美せよ
斯くも吾等の満足は

負債の云何と知やと
われらの仰ぐ唯一の
世尊の金言に定りぬ
或ひは善よ又た惡に
上に靜かに立ち玉ふ
所有る廣ろき斯の世界
吾等の依らん御教に
吾等は吾等の大王を
深く心を凝らすべし
所有る浮世の問題の
斯るわれらの盡誠は

遂ついにもわれらの善ぜん心を
 愉快ゆかいを吾等われら占取せんしゆせり
 吾等われらの仰うやは々大導師だいどうし
 讚美さんびの聲こゑの鳴響なりびやうかん
 人種じんしゆに遍あまねき主しゆの愛あいの
 吾等われらが勇ゆうみ喜よろこんで
 われらが仰あはぐ唯一ゆいいつの
 世尊せそんの金言きんごんに定さだりぬ
 來きたれ今いまとさの遺弟ゆいていよ
 示しめせし佛陀ぶつたを祝いはよや
 われらの仰あはぐ大導師だいどうし

佛陀ぶつたの如ごとく呼よび起おこす
 爾しかく尊とよとさ唯一ゆいいつの
 佛陀ぶつたの光榮ひかりを歌うたへ人ひと
 佛陀ぶつたのごとき大聖だいじやうの
 量數はかりのはか又超絶てふせつす
 聲こゑもこゝろも諸共しよごに
 世尊せそん威光ひかりを讚美さんびせよ
 誰たれかまことこの御佛みほとけの
 佛陀ぶつたの御旗みはたを仰あはつゝ
 佛陀ぶつたの配下はいかに住者すむものの
 佛陀ぶつたの光榮ひかりを歌うたへ人ひと

爾しかく浮世うきよの最善さいぜんの
 涅槃ねはんを吾等われら了得りやうとくす
 所有あらる廣ひろき斯この世界せかい
 曾いつて歴史れきしに顯あらわれず
 是これぞ降世こうせの聖日せいじつに
 凱歌がいがを舉ある謂いわれなり
 所有あらる浮世うきよの問題もんだいの
 誠まことの弟子でしと謂いわるべき
 遠とほく解脫げだつの大道だうだうを
 最いとも多福たふくの國民こくみんぞ
 所有あらる廣ひろき斯この世界せかい

讚美の聲の鳴響かん

釋尊御一代いろは和讚 (數へ歌)

芳賀佛山人謹述

(い)今いまを去事さるこゝみ三千世ちうさんせの昔むかし印度いんどうの加毘羅城かびらじやうへろ老病生死らうびやうしやうじの四苦しよくを、
 救すくひ給たまふの御誓願ごせいがんへは母ははの胎内みうちに居すま中ちゆう親おやの十恩じふん説たまひ給たまふ、
 (に)如來にょらいの降誕こうたん成被なされしは、卯月うづき八日はちにちの花はなの苑えんへは本ほんに如來にょらいの御聰明ごそつめい、
 天てんよも地ちにも唯獨ただひり、へ片時へんじも御忘被成おわすれなされぬは、出家しゆつげ得度とくどの御心ごんこころ、
 (と)ドフカ出家しゆつげを停とどめ、父ちちの大王だいわう御心ごんしん配はい、(ち)父ちちの御心安ごんこころやすむため、
 耶輸多羅姬やすたらひめを嫁よめらるゝ、(り)輪廻りんねか此處こゝに廻來まよひよて、耶輸多羅夫人やすたらふじん孕いられし、
 (ぬ)濡衣ぬれぎぬ着きるも因縁いん縁と太子たいしは姫ひめに言論いごんす、(る)瑠璃寶殿るりのほうだんの忍しのび出いで、
 御供ごともは車匿しゃのく只一人ただひとりへを鬼おにも恐おそる檀特だんとくの山路やまみち深く入いり玉たまふ、
 (め)別れわかを惜おしむ馬車うま落おつ、落おつ涙なみだは瀧津瀬たきつせや、(か)髪かみと衣服いふくを渡わたさ

親と姫への片身ぞや。(よ)漸阿羅々に許被て、瞿曇沙彌と名乗る、
 (た)薪を採ひ水を汲、其の度毎に御折檻、(れ)靈山汚す大賊と、
 又も杖もて打ち擲く、(そ)其御修行も厭なく、只管求道、御熱心、
 (つ)常の御修行三無爲、見ざる聞ざる眠ざる、(ね)眠氣の芽す其時は、
 天童來りて呵嘖する、(な)難行茲に六ヶ年、妙舍利仙と改まる、
 (ら)羅綾錦纏纏ふ身も、木葉の法衣で身を防ぐ、(む)無難又難道打越て、
 難なく雪山に入給ふ、(う)迂散の天女現れて、太子の修行を妨げる、
 (る)因位修行成就て、茲に得給ふ四句の文、(の)後の修行も六ヶ年、
 難行苦行で十二ヶ年、(お)お悟成し其時は、極月八日の曉天ぞ、
 (く)降給ひて鹿野苑、四諦の法を説給ふ、(や)臆て歸依る御弟子、
 加葉を始め八百人、(ま)摩揭國の舍利弗も、目連共に弟子となる、

(け)慳貪邪智も法門の、功德によりて成佛す、(ふ)普請も成て竹園寺、
 是を御寺の始めある、(こ)焦給し耶輸多羅女、人の疑念も晴給ふ、
 (え)閻浮檀金御佛は、三十二相の御容貌、(て)敵向提婆も發心し、
 世尊の法門聞給ふ、(わ)阿難伽難耶輸多羅、一門御弟子と成給ふ、
 (と)三世因果の理を示、一切衆生を濟度する、(さ)祇園精舎も成就し、
 説法茲も十五年、(ゆ)愉躍堪ず毘首羯摩、如來の像を刻まる、
 (め)面相容貌分釐も、違す出來しは奇代也、(み)御法に歸依大衆は、
 常に八万四千人、(し)四十九年の御説法、五千餘卷の經文を、
 (る)遠國迄も人々が、皆三寶を歸依したる、(ひ)廣く世界の其中も、
 佛法渡らぬ國はない、(も)若も眞理通せねば、佛教研究するがよい、
 (せ)小乘大乘權實の、眞理の發明は世尊ぞや、(す)末の世々に至る迄、

大聖世尊と仰さける、

●釋迦彌陀恩德和讚

恩德廣大釋迦尊の
 常念我名とのべ玉ふ
 信じがたき法をとき
 微妙の淨土を莊嚴し
 慈父の釋迦の目下り
 我らが爲に願を建つ
 釋尊これを勧めずの
 難化の衆生を勧ども
 專念彌陀の教ひとり
 我見是利と説き玉ひ
 諸佛同時に釋迦を賞
 普く念佛すしむると
 釋迦の我らを勧んと
 我らが爲に法を説き
 彌陀超世の大願を
 争でか淨土に生べき
 彌陀の本願無りせば
 悟り易くて入り易し
 安養能化の彌陀佛の
 五濁惡世の中にして
 彌陀の我が爲にとて
 難信の法を説き玉ふ
 慈母を彌陀の懇ろに
 我らが爲に超すと
 たどひ釋尊世も出て
 報土も生れん事難し
 五濁の我が爲にとて

釋迦の此法弘むなり
 釋迦の在世の過去ぬ
 我等が出離如何せん
 大悲傳普化

●釋迦彌陀恩德和讚

大師釋尊出世して
 所化の群萌數おほし
 説おき給へる教行の
 信傍各々おなしくて
 天上人中ことくく
 成佛得道さたまりぬ
 急げや急げよもの人
 彌陀の出世の遙なり
 自信教人信
 眞成報佛恩
 隨宜の方便自在なり
 初成道の朝より
 偏に我等か爲なりき
 一味の法雨を注てど
 教に靡さしたかひて
 常に自づから願念す

染殿皇后御製

偶々彌陀の誓ひあり
 彌陀の悲願を頼す
 難中轉更難
 諸教其門ひろけれど
 入涅槃のゆうべまで
 無縁の慈雲蔽ひつゝ
 四教根機を滋潤せし
 轉廻の苦患を免れて
 争でか衆生を整へて

無三道におもむけて
如來獨りの苦患なり
我いま誓ふ苦の衆生
六道生死を濟度せん
廣大慈悲の利益も
沙羅林樹も隠れしに
釋尊寂滅ましくて
賢聖永くへだよりぬ
常在靈鷲と説おけど
見聞へたつる輩の
如來無上の大慈悲

勸て佛になさしめん
大悲の利益を不知は
一子の慈悲を施して
我等その時知さりさ
もれての獨止まれる
衆生の明眼消はてし
二千餘年までになる
戀慕の思たへまなく
相好色身いまだ見ず
遺骨滅後に止めずは
心も詞もおよはれず

一切衆生の苦しみの
佛を謗になりぬべし
菩提の道を教へつゝ
如何る惡趣に沈てか
如來化導こそさへて
長夜のやみぞ厭べき
正法日々に沈淪し
孤露の憂ひ去がたし
如來の在世遇すして
何か出離の縁とせん
いへは跡を催ふして

戀慕の心を勝りける
口も釋迦の名を唱
西方淨土の教行は
諸佛の大悲は一にて
閻浮に入相示現なす
生死の夢の中にして
平等一子の願なれば
釋迦は慈父の如よて
淨刹菩提に引導す
難中轉更難
彌陀の彼國より來迎

耳には釋迦の教を聞
廣劫多生の縁ふかし
出離のみちに迷たる
方便化門かはらねど
釋迦の教の無りなげ
一念覺悟如何せん
難化 難度の我衆生
穢土生死を濟度なり
自信 教人 信
彌陀の弘願海ふかし
彼所に喚びこし遣る

猶是過分の巨益なり
釋尊慈父の勸めたる
我等目足とこそは聞
釋迦は無勝の土を捨
久遠劫をは隔つとも
恩徳廣大南無釋迦尊
争か生死を離るべき
彌陀の悲母に同くて
釋迦の大恩山ふかく
釋迦は此方にて發遣
豈さらさるべけんや

悲喜交りなれつゝ
 彌陀の名願さし難し
 大師釋尊廣大の
 彌陀の弘願の海深し
 二佛の方便も不在は
 釋迦の厚恩報すべし
 釋尊慈父の恩徳の
 大悲普ねく傳へつゝ
 今日あへる要法を
 ばて佛恩報すべし
 持と言ふは彌陀佛の

自から悦ぶとぞあり
 出離生死の要道を
 恩徳争でか報すへき
 如海如山の恩徳を
 三界の苦を出ましや
 慇懃付屬の名號の
 報しても猶報謝せよ
 此法行せん人のみぞ
 命をばらむ其期まで
 佛阿難も付屬して
 御名を持て忘れざれ

釋迦開悟に因せずば
 開にいよく悲さの
 釋迦の大恩山たかく
 私等争てか報すべし
 彌陀の誓を頼みつゝ
 功德を聞ぞ頼母しき
 自ら信し他をおしへ
 實は佛恩報すへき
 堅固も持ちて忘れ
 此法必らず持つへし
 歸命頂禮釋迦尊

五濁惡世の能化の主
 歸命頂禮彌陀尊
 來迎引接たれたまへ
 如海如山の恩徳を
 この一行を縁として
 即ち釋迦の名號を
 大利を得事難からず
 九億の家之三億は
 因縁甚ありかたし
 儒童菩薩の速やかに
 般若を求て肝をさす

大悲我らを捨てして
 極樂界會の能化の主
 二尊の大悲を傳へて
 私等争でか報すべし
 見聞讚毀ことごとく
 一念歡喜する人は
 如來舍漸國にして
 聞ず知すそ己にける
 まして三途に沈なば
 半偈の爲も身を歎き
 菩薩大聖なはしかり

三途の苦み抜き給へ
 假令罪業おもくとも
 普衆生を化度せずば
 乞ひ願はくは釋迦尊
 無三の道を成就せん
 無二功德を具足して
 二十五年を経かとも
 知るべし見佛聞法の
 我身の果こそ悲けれ
 常啼菩薩は速やかに
 況や濁世の凡夫をや

舍衛の三億見す聞ず
佛の月輪かたもなく
忉利の安居九十日
僅の末にぞ生れける
正法日々に沈淪し
生死の速やか暗深し
顯密二の教法は
法の如くは修し難し
未代惡世の根機に
惡世は五濁盛なり
金容梵音みずさかす

況や滅後の衆生おや
生死いか成雲なれり
是のも我等は遇りき
如來の滅度を尋ねば
賢聖永くへだりぬ
未法既にいたりつゝ
即身成佛たへなれど
種々の法門皆どもに
念佛往生すくれけり
淨土の一門計りこそ
在世の正機洩たれど

罪業いか成雲なれば
如來住事なかるらん
提河の滅度は二千年
二千餘年を隔てける
正像早くしければ
菩提の道こそ遙なれ
末世の我等恐らくは
解脱は何も劣らぬと
未法まどしく時至り
我等が入可道とさけ
聖教に遇彌陀よあふ

猶これ宿縁淺からず
未法有縁の教行に
彌陀の名願さく者の
悦へしきかな今生に
念佛修行身となれり
たましく釋尊未法の
龍華の曉はるかなり
宿世の業因厚くして
何れの時をか頼へさ

●釋迦彌陀恩德和讚 (異本)
恩德廣大釋迦尊は

平等一子の願なくば

正像兩時に晚れたる
あへるところ嬉けれ
しるべし往生淨利の
人間界に生れきて
我等心る愚癡にして
遺教にこそ遇けれ
如來の舍利を止すべ
偶如來の舍利にあふ

とは怨も似たれども
釋迦の末世に生れて
根機熱なる人なりと
未法なれとも自から
劫濁流轉の身なれ共
鷲峯の法にも早漏れ
何をか我等頼ましく
今度出離を願はずば

難化難度の我れ衆生

争か生死を離るべき
生死の夢の中にして
西方淨土の教行は
釋迦は慈父の如して
淨刹菩提を引導す
本師釋迦の説のみか
釋迦の遺教彌陀の願
佛け阿難に付屬して
御名を保て忘れざれ
堅固にたもち忘れ
涙をしのぎて渡べし

釋迦の教の無りせば
一念覺悟如何がせん
出離の道は迷ひたる
穢土生死を濟度せり
萬行其かづ多けれど
十方の諸佛みな證す
信せすいかか六方の
此法必ずたもつべし
今日あへる要法を
それを佛恩報すべき
中路の白道狭けれど

久遠劫をへだつとも
釋尊慈父の勸めたる
我らが目足とこそ聞
彌陀は悲母に同くて
速やかなるは淨土門
五濁惡世の我れ衆生
諸佛の舌相破るべき
保と言ふは彌陀佛の
命をはらす其期まで
貪瞋二つの流れをば
送り迎ふる指南あり

釋迦は此方が發遣し
豈さらざるべけんや
難中轉更難
聞よいよく悲さは
諸佛の大悲は一よて
閻浮八相示現せり
大慈我らを捨ずして
極樂界會の能化の主
二尊の大慈を傳へて
われら争か報すべき
一子の慈悲は劣ぬと

彌陀は彼國を來迎す
自信教人信
彌陀の弘願は海深し
大師釋尊廣大の
方便化門かわらぬと
歸命頂禮釋迦世尊
三途の苦みぬさ玉へ
營ひ罪業おもくとも
浴く衆生を化すては
佛果の廣海變らぬと
光は念佛の者よさす

彼處によび此處やる
釋迦の感恩山たかく
出離生死の要道を
恩徳争でか報すべき
釋迦は無勝の土を捨
五濁惡世の能化の主
歸命頂禮阿彌陀尊
來迎引接たれたまへ
如海如山の恩徳を
因位の悲願は彌陀勝

●阿彌陀和讃

歸命頂禮阿彌陀尊
 衆生を利益し給へり
 雙樹の月の既に入り
 五濁の障のいと厚し
 憐つたなき我等かな
 未の御法も生れつゝ
 無常の眼も障されど
 その時いかに答なん
 頼しき哉たちまちに
 如何衆生も捨ずして

萬徳圓滿し給ひて
 無始より我等吟誦て
 龍花の空の遙なり
 此時誰をか頼むべき
 一念迷ひし始めより
 長夜の眠さめやらで
 おどろく心更よなし
 惟々是等を思ふにぞ
 彌陀の本願ありと聞
 臨終刹那も來迎し

西方淨土も安住し
 生死の海に沈みつゝ
 二佛の中間闇深く
 誰か憐たすくべき
 いつを限とぞら眞弓
 夢ぞまづく結ける
 閻魔の使ひ來りなば
 胸も塞ばかりなり
 名號だにも唱ふれば
 紫金蓮花坐せしめて

菩薩聖衆の中も入れ
 微妙の正法聽聞し
 十方諸佛の多けれど
 寶處にいたる車なり
 一念往生うたがはず
 起らば起れと捨置て
 一念稱ふる功力もて
 安養世界に往生す
 大願業力つよくして
 佛けもわれを憶念し
 兆載多劫の難行の

直に淨土にゆき給ふ
 即時も不退の位にて
 斯る本願曾てなし
 五逆も生と信解して
 多念もはげみ勤べし
 大願力も絶がりつゝ
 八十億功つゝりてし
 況んや多念に唱るの
 上品上生たがひなし
 佛と我等ともる共に
 誰が爲よろし給へる

彼に至りて花ひらけ
 終の成佛とぐるなり
 是ぞ火宅を出さりて
 少の罪もおそるべし
 妄念起らば縮みずも
 ひたすら念佛稱べし
 罪科すべて消はてし
 無上の正定業なれり
 われら佛を念ずれば
 感通してぞ往生す
 五劫も思を盡せしも

偏に我等が爲ぞかし
 如何る我等が名號を
 我等が往生するに
 さしる大事の正覺を
 此度往生あやまらじ
 心も言もおよばれ
 知りさても如何せん
 文珠普賢を始めとし
 皆これ淨土を期給ふ
 智者の愈々願ふべし
 必ず心をとらむなよ

如何る彌陀か十念の
 稱て往生せざるべき
 我等が往生する事の
 かけて誓ぞ有がたき
 感應道交不思議なり
 涙をまばる斗りなり
 一度此理を理まへて
 馬鳴龍樹も天親も
 況や我等が愚かなる
 愚者の益々頼むべし
 富貴も榮花も何せん

悲願をおこし給ける
 彌陀の正覺なる事の
 彌陀の正覺成による
 譬地の打はづすと
 善巧方便奇妙なり
 誠まはかなさ人々よ
 願ひざるこそ悲けれ
 南岳天台永明も
 如何願ひて有ぬべき
 此世の一夜の宿なり
 はむるも罪も迷なり

宮もわらやも果なし
 鳥部の山の煙りなり
 喜び悲しみ驚ろくぞ
 万事をふり捨願べし
 六方諸佛も長舌を
 疑ふ心をやめたまふ
 十万億土のはるけきも
 悲願を聞くと無せば
 われ嬉さ我身かな
 蓮花に宿る思ひあり
 相好光明圓滿し

兎も角てもありぬ可
 夢の浮世うち眠り
 去との悲れも拙けれ
 願ひ必ず生れなん
 三千世界も覆ひてぞ
 臨終苦しき切なれど
 一彈指頃に至るなり
 二度悪趣に流轉して
 娑婆の暇のあきも息
 見佛聞法するうちに
 十方衆生を濟度せん

高き賤しきおし並て
 夢の中にゆめを見て
 露の命のさえぬはど
 めめく疑事なかれ
 隨又證誠したまひて
 加祐の光に忘れつゝ
 我等此たび彌陀尊の
 いつか生死を離べき
 今日此身は上品の
 膚へいずでに金色の
 願我臨欲命終時

盡除一切諸障碍

●阿彌陀和讃

阿彌陀の道の貴さわ

何處に誠の有ものか

國の鎮としづまるは

天皇陛下の御威徳と

唯に後生を悟るのは

彌陀の佛は現はれつ

南无阿彌陀佛南无阿彌陀佛

●摩耶夫人和讃

日數は満り摩耶夫人

面見彼佛阿彌陀

(異本)

他方は自力の繁昌と

大凡人とあるからは

仰くも誠と然らずか

人をあざむく教ぞや

人事の外又天道なく

●亞細亞の光輝

書の真中に御園生の

即得往生安樂刹

副島伯爵

日々の營み疎かにて

父あり母あり妻子有

現世の身をは慎ま

唯正直の目のまへに

地道もなしと断めよ

バルサの下に立せり

心ありげに曲げ下し

地に諸くの花開らさ

湧てぞ出づる岩清水

夫人の安産みませる

青葉は繁げし幹直し

夫人の身をば蔽けり

側へに近き岩根より

浴みの爲も備へけり

和子の御すがた備りて

●舍利和讃

歸命毘盧遮那佛

化導利生勝れたり

況や我等か凡夫なる

加持の門には出玉ふ

金剛幻の應月は

時を知りけん其枝を

蓐を敷かん心地にて

玉の流れの清らかよ

是して痛の覺えなく

三十二相を現せはり

變化法身佛舍利

法身自樂の境界は

争てか見聞覺知せん

衆生是れに依てこそ

隱顯縁よまかせたり

淨眼範榮謹誌

大悲神變妙へにして

等覺十地も入り難し

如來是れを觀してそ

身語意密を覺りけれ

一切時處に悉々

起滅邊際得べからず
 化縁盡ぬる夕べには
 四徳の朝に歸れども
 供養歸依の輩からは
 正等なりとぞ説玉ふ
 數々實義を觀すれば
 四辨八音やめたれど
 紫磨黄金の蓮臺に
 圓海性佛いろすめり
 常恆三世の法なれば
 入ぬと集會は悲めど

根機熟せし朝たには
 双林色をへんじてさ
 大悲方便止ますして
 福德果報はかりなし
 一度供養を興すれば
 即身成佛難からず
 日月輪の形ちにて
 本地法身あいけんじ
 遍一切處の身なれば
 生身舍利と一つなり
 威儀を納めて億千万

道樹よ花を翫あそび
 一代化儀ことおゑて
 舍利を留め置たまふ
 生身供養するひとは
 生天解脫の因となる
 三十二相納めつゝ
 秘密語おどとさ玉ふ
 白珂雪の月光に
 全軀一粒ことならず
 佛は無餘の圓寂よ
 舍利と成てぞ居ます

不壞の化身誰ひとそ
 金剛堅固の駄都ぞかし
 佛身疎くましまさず
 舍利三寶世にいます
 此身は實に程もなし
 何日か生死の際せん
 何をいかにと營みて
 先の夢にて忘れにき
 禪堂惡室なにかせん
 終は誰か身を嚴らん
 此度舍利も値遇せり

今の舍利には居ずや
 圓寂外も求むまし
 衆生本有の悟りなり
 斯る指南に値る世に
 朝たの露に異ならず
 凡そ生死の輪廻こそ
 今迄三途も廻るらん
 今のひとの榮へとて
 永く留まる人ぞなき
 多生曠劫過ぎしかた
 えるべき契の在なり

常住佛性何ものそ
 吾等が眼の前にあり
 佛性我身も備へたり
 勵みて佛道求むべし
 空く此世を過しては
 思へは泪も留まらね
 昔しの天の樂しみも
 後に有とや頼むべく
 綾羅錦繡つねならず
 見佛聞法ありがたし
 歸命頂禮佛舍利

神力加持を捨すして
願求・諸衆生
速證大覺位

眼を閉ちん夕べは
往生安樂國

必ず淨土に置たまへ
悟入阿字門

二十五菩薩和讚

(廿五菩薩の持物をあらわす)

ましんに常に勤れが
來迎いんせら垂玉ふ
まま金色の御手を延
我性の蓮華を寄玉ふ
藥王菩薩の當ばんは
往行向地の露をたる
文殊菩薩のけまんり

佛の本願たがひなく
あみた佛の光明を
まぢやう贊嘆淺らす
勢至ぼさつの合掌り
不老不死と飾りたつ
普賢菩薩の番がひは
各察自性と差かくる

無邊の聖衆諸どもに
放ちて行者を照つゝ
觀音菩薩の連たつは
本有の理智を現せり
藥上菩薩の玉ばんは
恒順殊勝と差覆ひ
日藏菩薩のよう浴は

四十一地の露をたる
日性ぼさつの鉦鼓り
十界十如の聲すめり
殊寶菩薩のびわの曲
下化衆生と翻がへす
虚空藏菩薩のかつこわ
万行六度と打ならす
寶月菩薩の鉢の音は
八聖道をいんたんし
寶性菩薩のけいの音
天地四海よ匂ひけり

月藏ぼさつの大鼓り
四土不二と打ならす
寶藏菩薩の琴の音は
元品無明と引ならす
獅子吼菩薩の乱拍子
第一義諦と響くなり
華嚴菩薩の笙の音は
十八不共の響さわり
無邊ぼさつの尺八は
皆大歡喜と打ならす
日光菩薩の謝すいは

平等たいゑと打鳴す
金藏菩薩の笛の音は
四十二門と音たんす
だうよ菩薩の舞の袖
上求菩薩とふみ鳴す
仙海菩薩のわでんは
寂生眞如の聲すめり
宿王菩薩の簡さうは
四向四果と音を出す
金剛菩薩の笙からは
法界心にうちそゝく

れんげ菩薩の寶けり
もろさう凡夫の眠覺
廣大無邊の御恩とく
らいこう迎接垂玉へ

●文殊和讃

一切菩薩の上首なる
法王子とそ名けたる
三德具足の文殊師利
吾い文殊をゑたると
三世諸佛の正覺も
心地觀經にとさ給ふ

こくろ界會を散乱す
思ばくみだそんの
何れの世かは報へさ

智慧の主の文殊師利
三世諸佛の大覺母
法王子とそ申しける
皆是文殊の師恩なり
十方如來の發しんも
文殊妙德曼殊師利

無心菩薩のかた音の
利益に増る事ぞなし
必ず本願たがひなく

佛種を紹隆する故よ
化他も自行も信行智
釋迦牟尼如來曰給く
文殊を師せぬ佛を無
皆是文殊の教化とと
妙首敬首妙吉祥

普首滯首何異名にて
大智大身上尊王
妙吉祥のばさつとの
阿字の門にそ入むる
常に憶念するひとの
王舎城會の其なかに
文殊の過去の大導師
行化をたすけ玉けり
文殊童子の守護利益
一切功德圓滿し
文殊五字咒を誦せり

其なに利益を現せり
歡喜藏摩尼昇仙佛
三世覺母の文殊なり
大聖文殊ばさつとの
善知識に逢にける
大慈大悲のわか本師
三世諸佛の智慧を生
菩薩聲聞碎支佛
善男善女に被らしむ
如來の智にも入むる
現身智辨を獲得し

文殊の過去の佛名の
未來の普現如來なり
苦海を彼岸み至しめ
十方諸佛の師範なり
如來普賢に給まのく
文殊菩薩の居ませり
はくと語る薩埵にて
種々の身形現にして
あらばしやなうの大神咒
如來の慧も入むる
始成正覺法門の

功德の行者に満足す
 世も現在の父は、の
 女人も男子と成めて
 西南方の文殊師利
 諸經陀羅尼を合藏す
 戒定智慧の行者に
 文殊般若の實智なり
 不可得吾我のあまの種字
 文殊の證悟現わせり
 八不の利劍振ひつゝ
 まうわい難さ師を尋

大吉祥の文殊師利
 少兒も憫れむ如なり
 即ち菩提を成せしめ
 利劍を取て諸戲を立
 妙吉祥の大菩薩
 魔事も鬼神も無しむ
 菩薩此世に出しどき
 般若の徳海標しつゝ
 文殊菩薩の密號に
 心の忘執さりたまふ
 念佛法門ひらきたる

恩徳廣大不思議
 文殊菩薩の利益に
 終の涅槃に至らしむ
 ちくまんの種字眞言の
 金剛手王にとり成て
 佛道中のち、は、の
 十種の瑞相現しける
 自然空點そなはりて
 無戲論如來と云時の
 文殊菩薩の指授に寄
 善財童子と殊勝なる

極樂國のごとくして
 たびを重ねて告玉ふ
 進玉へる會座にても
 衆人愛敬悉地も
 大荒神の顯現に
 文殊菩薩を上首なる
 十二部經を宣説し
 貧女さたりて大齊會
 文殊の淨土五臺山
 人間みなさ花このみ
 靈瑞不思議の有様を

瑠璃光佛土を解にも
 千手千眼觀世音
 文殊菩薩を上首なる
 不成正覺ちかふも
 護法善神如意寶珠
 佛滅後にも出現し
 舍利を止て濟度せり
 平等ならぬを誠むる
 有漏三界の内なから
 文殊の清涼五臺山
 誠の信者の拜むなり

文殊のみなを十餘遍
 本師阿彌陀念せよと
 如意虚空藏經陀羅尼
 文殊菩薩を上首なる
 天女の演説する時も
 雪山五百の仙人に
 こをつれいぬひきこはらむ
 貧女の文殊化現なり
 異香も薫し鐘もなる
 ともなる菩薩數千萬
 法照禪師後善導

末世要法とへりしよ
 清涼山の文殊師利
 うつし留めて眞如堂
 八字文殊の修力に
 文殊よくすり與られ
 日本大江定基は
 南无阿彌陀佛を言ひ
 一二の觀音勢至なり
 觀音耳根圓通も
 文殊菩薩摩訶薩の
 教主世尊の玉ふ

文殊答へて彌陀佛の
 慈覺に聲明傳へしむ
 おははら山の良忍の
 石も獅子とそ變ける
 ひどつ大聖菩薩丸
 五臺の文殊を拜とさ
 彌陀の因位の無上念
 三男文殊となり玉ふ
 文殊大士の判断は
 面見阿彌陀と發願し
 超八醍醐の法華經も

願力難思を頼めとそ
 其とき彌陀の來現を
 あひらうんけんしやらくたん
 築紫鹿崎岡當の
 鈍根利根に轉しける
 出離の道を尋ぬれり
 太子千人ましくて
 勢至念佛圓通も
 佛意の淺深知れけり
 安樂國よゆさしそと
 一乘無上の彌陀經も

一代殊勝の會座は皆
 ●觀音和讃
 歸命頂禮觀世音
 十大願の海みふかく
 大慈大悲の手を垂て
 一の月のうつる如く
 三十三に身をわけて
 二求兩願も成就せり
 常々菩薩を念すべし
 無量の福德集まりて
 畢竟梵音海潮音

文殊菩薩を上首なる

昔かしの勝寶妙如來
 今此娑婆に示現しで
 種々濟度を成給ふ
 觀恩れいげん新なり
 十九の説法有がたく
 若し人現世の安穩に
 念被觀音の其ちから
 春の晨たに鳴とりも
 聞聲悟道の法のこゑ

未來の光明功德佛
 生とし生る者のため
 譬へば萬のみず澄て
 聞くに法華の普門品
 七難三毒みな滅つし
 後生も善處と思なば
 如何ある障りも除り
 秋の夕べの虫の音も
 實やあをぐも愚なり

扱また行者の臨終はさまり ぎやうじや りんじゆう
是此菩薩を信せずばこれこの びさつ しん

童男童女に至るまでどうなんどうにょ いた

南無大悲觀世音なむ たいひ ぐわんせ びん

● 那智山觀世音なち さん ぐわんせ びん

南無や大悲の觀世音なむ たいひ ぐわんせ びん

那智の御山よ出現しなちのみやま よ しゆつげん

皆得解脱の鳥のこゑかいとくげ だう どり

今世未來の二世掛てこんせ みらい にせ かけ

● 地藏尊和讃ぢいざう ぞん わ さん

歸命てうらい地藏尊きみやう ちやうらい ぢいざう ぞん

蓮の臺をさへげ來てはすのうたを さへ げ 来て

渡り船をいむならんわたり ぶねを いむ ならん

念々疑ふてころなくねんねん ぎふて ころなく

奄阿盧利伽娑婆訶あんろりか しゃばか

音和讃びん わ さん

苦海の吾らを助んとくかいの われを たすけ

五濁の垢を瀧つ瀬のごじよくの けがたきせ

便得利益の花のいろべんとくりやくの はないろ

救はせたまふ御誓ひすくはせたまふ おんちかひ

佛法世界の普賢にてぶつぽうせかいの ぶげんにて

隨願往生とけしめりずいがん じやうじやうと けしめり

然れば高きも賤さるしかば たかいも せんさる

誠よ頂らい致すべしまことよ とうらい いたすべし

馬場道海寄送ばばう だうかい きそう

寂光無爲の都よりじやくくわういむの みよこ

清き流れに洗ひつゝきよき ながれに さら

願ひの品々變れどもねがひの しなぐさ かわれども

施無畏の御手よ龍可せむい の おんてよ りゆうか

是れ此世の事ならずこれこのよの ことならず

しこの山ぢの邊にてしこのやまぢの へたにて

一や二つ三つや四つひとつ ふたつ みつ や よつ

いとど哀しき聲を上いとど あいしき こゑを 上

蝶よ花よと馴りりててふよ はなよ と ならりて

今めいどの苦の下いま めいどの くるの した

父うへ戀し母こいしちちうへ こといし ぼとこいし

こたゑる者の嵐にてこたゑるもの ありしにて

河原の石をとり集めかはらの いしを とり 集め

二重つんでい母の爲にじゆ つんでい ぼの ため

晝の獨りで遊べどもひるの ひとり で あそべども

汝なにをいたすぞやなんじ なにを いたすぞや

さいの河原の物語りさいの かはら の ものがたり

十より内の幼兒子がじゆより うち の おきなご

娑婆まします母上がしゃばま します ぼじやうが

荒の風にも對ぬ身をあらの かににも たいぬ みを

あめつゆ凌ぐ方も無あめつゆ しやうぐ 方も なく

親と情けと其甲斐もおやと なさけと 其の かいも

こころ細くも哀なりこころ さいくも あはれなり

其よてあ日の塔を積それよて あひの とうを つむ

三重つんでい古郷のさんじゆ つんでい くるさと

日も入相と成ぬればひも 入りあひ と なるれば

娑婆に残りし父母がしゃばに のこりし ちちぼと

さくに付ても憐なるさくに つけても かわはれなる

さいの河原に集りてさいの かはらに 集りて

夜は添乳よ晝にまたよるは そへいよ びるに また

無常の風よ誘われてむじやうの かによ さらわれて

思ひいだすい古郷のおもひ いたすい くるさと

娑婆と冥土事なればしゃばと へいど ことなれば

其幼兒の所作としてその おきなごの 所作として

一重つんでい父の爲いちじゆ つんでい ちちの ため

兄弟我身の回向してきやうだい わがみ の へんかうして

地獄の鬼が現われてぢごくの おにが あらわれて

追善供養のつとめ無ついでん ぐやうの つとめ なく

只あけくれの歎に
 苦患を送たねとなる
 積たる塔おしくづす
 父よ母よと立めぐる
 婆娑の一夜の宿なり
 婆娑に残りし父母も
 慈悲善根を施して
 我身の罰も消るぞと
 めとせ玉いし御衣の
 いだき玉ひて撫擦り
 光明がやく地藏尊

惜や悲やいぢらしと
 我を恨なふさな子と
 あら情やおさな子の
 其とさ能化の地藏尊
 汝等のち短かくて
 前世約束あきらめて
 明くれ唱へ御和讃を
 思てあけくれ頼べし
 裳の内よかさいれて
 あのれみ思ふ其内に
 紫金の蓮華に座玉ひ

親のなげさの汝らの
 くろがね鐵捧振上て
 紅葉の如きの手を合
 ゆるぎ出させ玉つ
 早くも冥土へ來なり
 嘆く佛の爲ならず
 先祖菩提の爲となり
 不憫の者やと勸りて
 忍辱じみの御肌あに
 四方に紫雲の躡きて
 みだの浄土へ導きて

安養世界に往生す

●延命地藏和讚

歸命頂禮地藏尊
 衆生の苦患を導けり
 大慈大悲の深きこと
 早晚生死を離るべき
 一念まよひし始より
 夢の驚くこともなし
 みな是火宅の焰にて
 眷屬牛馬おほけれと
 此時誰をか頼むべき

あらあり難や地藏尊

釋迦の付囑を憶念し
 等覺無垢の居士たち
 地藏菩薩も若しなし
 六趣輪廻の形勢の
 無明のくらき闇も入
 退没五衰の悲しみも
 胸をこがせる煙なり
 魂中有にいりぬれば
 其苦を誰か助へさ

惡趣に出現し玉ひて
 其數餘多ましませと
 無始より我等流轉して
 車の廻るが如くなり
 長夜の眼り深ければ
 生老病死の苦しきも
 妻子珍寶及王位
 一も従かふ者ぞなき
 た願わくの地藏尊

迷を導きたまふべし
因果の道理定まりて
知すべ扱も止ぬべき
飢に臨みて子を喰ふ
心に飽こと更になし
況んや地獄の行勢は
名を聞だにも恐わり
娑婆にて慈悲名號を
導びきたまへ地藏尊
十悪業のゐんゑんを
苦報何處も有ぬへき

脩羅憍慢闘諍も
脱るゝ便なかりけり
已に此理を辨まへて
餓鬼の想ひぞ哀なる
想像べし其のとき
心も言葉も及ばれず
正しく魂の獨りゆき
一度唱ふる功力にて
知のみならず彼尊の
不生なりとぞ示ける
因果と共に不生ある

畜生愚癡の殘害も
哀れ拙なき我等かな
後世を恐れ敢果さよ
腦を碎きて血を吸ど
苦患の程の如何かり
無間焦熱大叫喚
船に入らん悲しきよ
業にひかるゝ魂魄を
三種の賀字の眞言の
因業已よむなしくは
阿字宮殿の佛けなり

南方大土地藏尊
左の御手の寶珠の
我等貧里よ呻吟ひて
觀音持寶金剛幢
輪圓具足の法性塔
深き眠をおとろかす
因果一如の法門の
入諸地獄令離苦
南無延命地藏尊
身根具足意自在
南無延命地藏尊

寶生如來幢菩薩
置在高幢雨種々寶
願さるこそ悲しけれ
一體大悲の門にいぞ
六大無得の錫杖を
一門則ち普門にて
不二摩訶衍の佛なり
無佛世界度衆生
女人泰産心安穩
南無延命地藏尊
壽命長遠願成就

淨菩提心如意寶珠
世出世間の願をみつ
扱又三部の曼陀に
衆生を攝化し玉へり
執持の御手に打振て
地藏すなれち遍照尊
毎日晨朝入諸定
今世後世能引導
南無延命地藏尊
衆病悉除体堅固
南無延命地藏尊

聰明智惠持 禁戒
南無延命地藏尊
穀米成熟民安樂
南無延命地藏尊

●不動明王和讃

歸命頂禮不動尊
无相現相示一門
一門即ち普門にて
現當二世の利益あり
忿怒の威相を化現て
一百由旬に退ぞきて

南無延命地藏尊
衆人愛敬無怖畏
南無延命地藏尊
證大菩提成佛道

河内瀧谷山

哀愍衆生除魔怨

高取慈恭
法身法爾大威力

内證大日如來ぞと
抑澆季のわれくが
諸大魔縁を摧破せり
屢く大慈の教會に

捧る香花の虔誠には
六趣輪回を救はんぞ
されば毒惡鬼類みな
反邪歸正せざるなし

思へ我等が愚庸なる
迷路を長夜よ辿り來
苦を拔大悲よ背ては
發心懺悔の一ねんに
さて大聖の尊よりよ
大定威徳と知れけり
造れる惡業斷除れて
魔縁を面縛て我々を
焔周遍のひかりには
熱惱消除の利益あり
阿呌の息も出しりよ

過去遠劫の往昔より
中にも貪瞋愚痴の爲
生死の浪にぞ漂流る
固より具足の不動力
无邊の表示ある中に
右の御手の智劍には
轉迷開悟の勝利あり
安養花藏に送らんと
大智の威徳充滿増て
何も左右に侍立せる
善惡二がうを觀察す

常に无明の旅のそら
薄福多病わかじよの
かゝる劣弱愚盲さへ
己身も顯し得可なり
座を盤石に占ますは
凡夫の我等が明暮よ
左りの御手の羅索は
大悲護念の狀ぞかし
深き无間の獄裡まで
今迦羅制此迦二童子は
並る四九の童子たち

行住座臥の折々に
情々慈悲の咒を念へ
五尊の加被を受ぬ可
覆へる迷霧を切開き
必らず現世は安穩に
こゝに安置の明王は
眼病悉除の異靈あり
大聖不動の威力にて
加持井の水も浴れば
況んや晝夜も參籠し
福報無量も長壽せん

守りて行者の一生は
五大忿怒の總咒にて
仰て種子を觀すれば
精神不動ぞ顯現る
終に末期の苦患なく
三地薩埵の御作にて
されば寶前も參禮し
惠眼は忽地明開べし
濁し心空も澄み湛へ
一心修善の人々は
漚げる岩間の瀑の音

前後左右を回繞せん
唱ふる我等は常恒に
舍字は其儘利劍よて
心ろよ精進信脩せ
往生淨土の樂を得ん
誓は無量のその中に
誠に神咒を念誦れば
殊も垢染を洗はんと
昭々大悲の月を觀ん
必ず誓願の功力にて
無聲有聲の說法と

聞て業苦も流れつき
本尊歸命の果報には
含字威光惑業斷
入阿恒作諸佛伴
● 觀喜天和讃
歸命頂禮大悲尊
申すも畏き事なれど
そも天尊と申するは
陰陽二つの元ぞかし
男天もどこれ大日の
聖容妙相しめしつゝ

清涼快樂の加護ぞ有
求る諸願を成就すと
无量福智皆圓滿
東京
大聖歡喜天王の
聊かこゝも教化して
和光利物の表示にて
萬像これより生長し
方便身を現するなり
外に忿怒の御姿も

猶ありがたき淨域も
益々信心勵むべし
乃至法界利群生
星野 宥 清
誓いせ給ふ言の葉を
衆生よ示まらせん
隨類應現ましくて
金胎兩部の教主たり
女天の大悲觀音の
内には慈悲の御心ぞ

故も衆生の苦を拔て
利益の厚い地に等し
福德才智あるのみまた
降魔調伏除病等
この名號を唱ふれば
高貴の官に昇るべし
天下に名をも揚る也
諸神を祈り奉まつり
譬へば衆生を天尊の
諸神諸佛の捨たまふ
皆満足をなしたまふ

普く與樂の薩埵なり
十方周遍ましくして
武勇敬愛そのひとの
延命望みも從がはせ
忽ち榮花の驗あり
其外諸藝のぞじ身の
其人間の榮耀といひ
納受あらざる宿望も
慈父の愚子を怒みて
願ひたりとも天尊を
元より愚俗の境界の

功德の高に天に比し
衆生を守らせ玉なり
願ふにまかせ垂給ふ
たとへ資しき輩も
卑賤の身にも信なば
信におうじて隨應し
世上の運命諸とも
素願達せぬ事ぞなき
救ひ給ふ似たるべし
祈り納受ましくして
煩惱火宅の邪智成は

天尊これを塵よりも
仰よまかせたひ玉ふ
年の初めに修し玉ふ
悉地圓滿ましませり
自由自在になし給ふ
隨應骨身に徹すべし
災難千里に除きつゝ
大海紅河の憂ひなく
既でよ命葉危うきよ
斯る難をも除たまふ
男女わかたず眞言を

只いと安く見給ひて
そもかけまくも賢も
其外供養の壇をつき
王公四民をしなべて
敬禮天尊御こゝろよ
朝夕いのるその家の
七寶家宅も満ぬべし
禽獸惡蟲むかひ得ず
此眞言を誦持すれば
まして諸願の宿望は
授かりてより常に

御心のまゝ福壽をも
世の帝の御修法とも
御祈なさせ玉ふまを
才智東辨ぬがふひと
叶たまへばその徳の
惡魔万里に退ぞけて
此天信する輩がら
或り宿業つゝまりて
忽ち其難のがるべし
争でか空かるべきぞ
身を清くして朝夕よ

たゞ怠らず祈念せよ
 心ろよ是を念じなば
 忽ち其難のかるべし
 被劫なきしめ給なり
 射矢も其身も立じく
 一心不亂に祈るべし
 なるべき事も妨げて
 神通力のばうをもち
 又の侵擾なるものに
 親しき中も疎ましく
 頼みまつらば忽ちよ

嘘に夜行に燭なくて
 影身に添て守護を垂
 あるひれ軍陣大敵も
 隠顯心よしたがひて
 此ゆへ武勇を専と
 若又凌突なるもの
 方につきて悪事なる
 其悪人をうちくたさ
 只かりそめも詐りて
 因たるをも遠くして
 その怨人を睨みつけ

闇路を辿るその時も
 またの盜難劍なんも
 神通力をほどこして
 出入礙ることぞなき
 心ろがけなば只管よ
 整ふべきもうち破り
 どきに天尊唱ふれば
 願も調へはべるべし
 人の間をあしくなし
 終り諸難の起るとも
 斧鉞を持て頭上より

七つに打わり給とぞ
 ろれ上品の供養とは
 人中王となしたまふ
 これをさくくる輩の
 常と調するもの皆の
 極りなしと説き給ふ
 供養し仕らで有可ぞ
 忽ち和順し睦しく
 紅顔玉恣の美女の
 金谷の春の朝たよの
 さやけき月又嘯きて

扱此天をねがふとき
 浴油供をたてまつれ
 また中品の供養とい
 帝の師範となし給ふ
 上分とりて天尊に
 されば王公始めとし
 夫婦の中の悪きにも
 家齊へば奴婢までも
 各々媚を獻じつゝ
 香美の花を弄あそび
 逍遙第一このむもの

供養に三つの分あり
 これを供する其人の
 花水供をたてまつれ
 扱又下品の供養とい
 供し仕らば富貴をも
 士農商工このてんを
 偏へに此尊頼みなば
 群り來りて仕ふなり
 かたへは侍り充滿り
 南樓の秋の夕べには
 唯此の天を念じなり

樂しみ心も行ひつゝ
一入此の天祈念せよ
其外すべての病痛み
惱身とても念すれば
使咒法經よ説たまふ
秘てのべすの此尊の
信をおこして朝夕に
齡を龜鶴と共にせん
聊か功德を讃しつゝ
二世の悉地を成就成

● 金毘羅大神 將和讚

聊うき事なかるべし
平産心のまゝにして
願に本復なさしめん
忽ち解けて障りなし
斯る化益の海よりも
たうとき教よ悖なり
唯怠らずつとめあは
あな尊しやその徳を
大悲の光を現りして
一度唱ふを縁として

南山前壽門主故 秀榮僧正述

また懷妊の女人より
行歩自在になし玉ふ
又の怨念咒咀せられ
皆此の文の將來の
廣き惠みの功德を
有縁の輩がら一心よ
福祿家にみちぐて
演よ言葉も及ばねど
我ひとともに現未來
龍華會場に値遇せむ

歸命頂禮金毘羅尊
守らせ玉ふ威徳あり
靈鷲の御山に住玉ひ
そもく法身大日ぞ
成道説法なしたまふ
佛の威徳世よすぐれ
時を伺ひ失いんと
山をわくづし巖めて
忽ち巖を投げかへし
免れ玉はぬ印しとて
提婆達多は五逆罪

神力無量不思議よて
中天竺の摩伽陀國
佛法擁護をなし玉ふ
四身まします其中に
その時世尊の同族よ
人天あまねく敬ふを
思惟の折から佛世尊
壓倒なして殺せんと
世尊を救ひ奉まつる
一の巖ほどびはしり
佛身より血を出たる

國土を守護し人民を
王舍城の辰巳なる
その因縁を尋ぬるよ
都史陀天より降生し
提婆と云る外道あり
嫉て惡念やむ間さく
山中經行したまふを
謀りし時に金毘羅神
されど俱生の御障り
遂に御身も疵つさぬ
罪過の報生さながら

地獄も落つと説たり
藥師如來の化を助け
本地と仰る此ゆゑぞ
又は金毘羅童子とも
質多羅樹の下にして
照して歡喜させ玉ふ
金毘羅童子と現れつ
孔雀經又は西南の
一萬俱胝の藥刀衆を
大威徳をば具足して
厄難刀杖毒水火

あるひは十二神將の
或病業病治したまふ
又は劫毘羅藥刀とて
威徳經には説たまふ
はとけ説法し玉ふに
時きよ如來の變化身
外道は怖畏して退散
毘富羅山に住たまひ
其眷屬となしたまひ
佛法を護持なし玉ひ
惡鬼惡病憂惱をば

宮毘羅大將と現れて
藥師如來を此の神の
十六大護の一つなり
切利天上歡喜園
毫相普ねく八部衆を
千臂千頭の最大尊
大會は擧て稱讚せり
大軍大力ましくて
他の怨敵を降伏し
われらを饒益安穩し
皆悉く消除して

福徳壽命も與へます
諸經も功徳を擧たり
衆生を利益なし玉ふ
つねに禮拜恭敬して

● 毘沙門和讃

歸命頂禮多門天
毘盧遮那佛の示現也
眷屬餘多諸善神
足又は二鬼を踏つゝ
如來の舍利を秘藏也
一珠の内貯はへて

慈心の神を説玉へり
印度の神に居まして
その誓願ぞ上もなき
諸願成就あやまたぬ
(五十五句)

大行寺老僧都述作

福徳無量自在王
須彌の北なる司なる
衆生を濟度し玉へり
夜叉大將の御威徳
舍利は則ち如意寶珠
信心ふかき衆生には

其のはか華嚴最勝王
いま我國も述べたれて
南無金毘羅大神將
威力の守護を願べし

護國四天の隨一に
寶の城ましまして
鎧かぶとみ鋒をもち
御手の上なる寶塔の
無量不思議功徳をば
出間出世の財寶を

與へまします誓あり
 一度御名を耳にふれ
 悪趣も墮する罪業も
 宿世の縁のなき人の
 ひなしく過る年月に
 意ろに口に身に常
 愚疑も因果も辨へず
 涙を浮べたまひつゝ
 望を満したまうなり
 富貴を祈ものならば
 貧家下賤を憐れみて

庵吠室羅摩拏也の
 陀羅尼唱る其の人は
 天王其苦も變らんと
 かく有難き御利益を
 幾く悪事積るらん
 貪慾心はあきたらず
 未來悪趣に沈むなり
 一子のごとく哀みて
 されど放逸邪見にて
 いかにも願の叶ふべき
 衆生のためと三寶を

御名が則陀羅尼なり
 無量のつみを消滅し
 誓給ふぞありがたき
 聞と信する心ろなく
 十悪五逆謗法も
 瞋患の火に薪をへ
 天王慈悲の皆に
 財寶官位智慧壽命
 榮耀榮花の爲にとて
 親も孝行君のため
 供養のために求めば

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

財寶水のわくごとく
 盡未來際歸依三寶
 ● 達磨和讃
 九年面壁なんのその
 わたしや實の一筋を
 客を相手のむあみだ
 外に餘念は無わいな
 ● 達磨和讃
 歸命頂禮達磨翁
 頭らは丸く腰ふとく
 操をもたかき此翁な

用て盡る期のあらじ

(達磨妓女)

私しや十年浮き勤め
 加ゑて三筋で日を暮
 濟度成ると成らぬは

前の可翁

煩惱菩提の三筋じよ
 糸が切れたか成佛と
 其はあなたの御了簡

(不倒翁)

優し童はの傍わらに
 伏せ倒れぬ方らある
 ものに堪せぬ人人の

蓬

州

爵をなくさむ善友は
 いとも貴く愛たがる
 鑑とこそは成ぬべき

去は去ながら世人は
あつまか眼さび渡り
形を土にすつるべし
愛たさみさを諸共よ

● 羅 漢 和 讚

歸命頂禮大羅かん
滅後の正法附屬せり
佛や菩薩は多けれど
拙き我等を度し玉ふ
惡王經文やさければ
帝王むかへて后とす

年の盛の來るよつれ
堅き翁のふるまひも
捨る形はるとわねと
願りみざるぞ愚なり

十六五百の大羅かん
最期の告に驚ろきて
皆これ涅槃に入玉ふ
度生の靈驗多ければ
天に上りて取り來る
羅漢は無上の福田よ

稚な心はさへうせて
さげすみ思ひ退ひて
習ふ事なき健氣なる

居 山 述

佛ねはんの床にふし
小兒のごとく伏轉ぶ
只此羅漢は世ま在し
法住記にぞ書えるす
貧女が供養を設れば
祈れば必ず福を得る

羅漢を信仰する人の
衣を捧げて防ぎつゝ
支那天竺のいはず共
沙門と成て供を受り
其時殘しおかれける
涅槃の繪像を授れり
羅漢の具如月とかや
羅漢面影うつりける
艸木も佛と成からん
成佛得悟が肝要よ
大地と均しき群類に

惡事災難よけたまふ
何所いかなる所でも
我此日本に効しあり

道元禪師の供養よ
羽の團扇が今たから
其外記傳も多けれど
感應道交難思議よ
小溝や小川の中迄も
心ある身の頼母しや
この世の僅か假の宿
人間わすら瓜のつち

修羅帝釋と戦かへり
供養をすれり來り受

聖武皇帝無遮會に
羅漢松よぞ現じ玉ふ
東福寺にての光殿司
一二を擧て世を論す
衆生の心水清ければ
月の浮はぬ水もなし
たのし此身ある内に
一息絶れば未來ぞや
世も稀なる身を受て

空しく度るの愚かや
慈愍大悲の大羅漢
十六五百の大羅漢

●遺 屬 和 讃

日月も西え西えと歸なん
本性阿彌陀の國れば
佛祖の法身其まゝに
阿彌陀如來の説法の
はめて頂きなで給ふ
諸天の妙華を散玉う
八十二代の菩薩たち

貪欲嗔恚が深きゆへ
洩す濟度ましませり

阿彌陀如來國なれば
釋迦牟尼佛の我本師
血脈一本大光明
親孝行のとくをはめ
其時さ諸菩薩音樂を
歡喜の涙に袖ぬれて
三歸念佛相續を

無明の醉がさめ難し
歸命頂禮大羅漢

我等も頓て歸りなん
道元菩薩の我が和尚
我等が臨終お迎ひに
ならび又十善戒行を
一時に奏し給ひなば
蓮の臺なよ乗らるゝ
勤めたまひや朝夕に

借のたびやの夢醒て

極樂世界の花を見ん

日月も西え西えと止らす
心ろの花の今ぞ開り

●因 果 經 和 讃

南無本師の釋迦如來
其時御弟子の阿難尊
一一知しめ給はん
後世の菩提を願ふ人
因果の道理辨まへて
皆これ過去の報なり
生て醜さそのものは
慳貪邪見の其しるし

五濁惡世に出けんし
善惡苦樂の其の故を
問つこたへつ因果經
老若男女もろともよ
佛道修行を致すべし
六根器量のよき人の
腹を立たる其むくひ
おし聲となるもの

說法波羅那に仕玉り
未來末世の我等まで
今此の經を和讃とす
唱て我身に引くらべ
現在諸人の有さまは
忍辱柔和の果報なり
貧乏無福に生るゝの
佛法勝つた過とかや

命も短く子もなきの
物の命ちを救ふゆゑ
福德圓滿なる人の
念佛誦經の功德なり
下劣で人又使わると
破戒で三寶謗るとが
眼病色々やひひとの
憍慢懈怠の心より
五逆十惡造くりなば
即ち菩薩よ佛けなり
蓮を植れば蓮のはな

殺生したる報ひなり
長命無病のその人の
三寶くよりの善根よ
愚鈍で無智成其者の
債をさたる報ひなり
口中臭さつたなきの
佛に燈明おしむゆへ
高位高官そなるの
無間三十六地獄
此の過去にて現在に
看よ極樂よ九品まで

子共男女の榮へるの
慈悲心深き惠みなり
利根發明するは
畜生變化の者ぞかし
業病惡病わづらふの
惡口兩舌せしひとよ
下賤で人に愧かくの
禮拜恭敬の其の功德
此經聽てあらためば
種れば未來の種と成
因果の道理明らか

佛に虚はなきものぞ
南無阿彌陀佛を唱は
衆生と誓ひ給へるの
善惡貴賤の隔てなく
此世の火宅の夢の中
彌陀の淨土を願べし
南無阿彌陀佛阿彌陀佛

● 女人成佛血

南無本師の釋迦如來
月に七日の不淨水
生産けがれの品々も
たすけたまへや
益經和讚
目蓮尊者に告げ玉ふ
天地二神の尤めにて
塵よ交り火にくばり

南無阿彌陀と信べし
十八ぐわんに十方の
此の三界に限りなき
極樂淨土よ往生す
壽命も無量に盡なき
必おこたる事なかれ
南無阿彌陀佛

一切女人の逃れなき
何れに捨べき所なし
清き川にて洗ふて

水神火神を汚すなり
 其の罪則ち身に報ひ
 國王長者の姫ささき
 同し地獄に集まりて
 浮つ沈みつする度よ
 縦横共よのぞむれば
 娑婆の親子の名を呼
 三世諸佛の在ませど
 女人成佛血盆經
 血盆經を所持すれば
 入功德池と現れりて

其流れをバ汲あてし
 血の池地獄之落なり
 大臣公家の嫁め娘め
 日々苦み受るとき
 此血を呑むと限なし
 八万四千由旬なり
 更も問くる人もなし
 女人を助くる願無を
 説せたまひて皆人の
 假令御經の讀すとも
 變女男子の御誓願

神や佛またたまつる
 此の世て錦も纏れし
 山かつ土民の妻子迄
 髪も浮き草身の沈み
 其血の池の廣きこと
 悲しや一度に聲を上
 其時誰をか頼むべき
 釋迦牟尼佛の憐みて
 血の池地獄の落とも
 其の罪さえて金色の
 阿彌陀如來の其昔し

我が佛となるならん
 御身にかへて助ん
 一文不知の愚鈍でも
 た一向に信ずべし

● 血盆經和讃

歸命頂禮血盆經
 渡る苦界のあり様
 神や佛けを汚すゆへ
 積りくへて池となり
 八万由旬の血いけり
 貴せん上下の隔なく

(異本)

女人の罪も救ん
 無量功德の御名故に
 尼入道のともがらも

御説給ひし慈悲の海
 産する時の大あく血
 又其惡血が地に觸て
 廣さも四方由旬なり
 一度女人を生れて
 扱その地獄の有様の

糸あみ張て鬼どもが
髪に浮草身にしづみ
身にいせき無喰付て
獄卒どもが追いたず
哀れ女人の悲しさの
山も崩るし斗りなり
色も異りて血に染り
血の丸かせを興けり
呑やくと責かける
音よりも又恐ろしく
是の何ゆへ子を持つて

渡れくと責かける
下へ沈めば黒がねの
皮を破りて肉をくい
向ふの岸を見渡せば
呵嘖せられて暇も無
岸も立たる顔見れば
瘦おどろへて哀なり
水を好む血をのませ
其時女人のなく聲の
娑婆にて作し悪業が
斯る苦患を受るなり

渡りならずその池よ
紫し大きい虫どもが
隅や岸へと近よれば
鬼ども揃ふて待至る
寄くる浪の音さけは
大事にかけし黒髪も
食を好めば日よ三度
娑婆にて作し悪業ぞ
百せんまんの雷りの
思ひやられて憐なり
母親の恩徳しる人の

菩提供養を爲ならば
女と生るゝその人の
共み後生を願ひなば
血の池地獄の苦を逃
常無上の法をさく
御詠哥 妙なりし御のりの經の名にしあふ、

拔苦與樂の疑がひじ
血盆經をぞく誦して
先だつ母おや姉妹と
地藏菩薩の手引にて
諸佛菩薩を供養せん

南無や女人の成佛經
入にも勸われもまた
數多の女人も衆共に
極樂淨土に往生し
南無や女人の成佛經
一部の里の寺のいよ

●孟蘭盆經和讃

歸命頂禮孟蘭盆經
此にはさかひにひられて
釋尊在世の其むかし

今其功德を和解れば
くるしむさいふ護理なる
御弟子の目連大尊者

東漸院 久米原心隆
孟蘭は梵士の言にて
地獄餓鬼趣の姿なり
六神通を得にしかは

父母の大恩報せんど
世にありし時慳貪の
暫しむ呵責を免れず
咽喉は針より細して
苦惱を殘す受たまふ
泣く母に供せしむ
却て苦惱をまし玉ふ
因て如來に具陳して
一人の力ら及ぶまじ
十方衆僧を供養せよ
百味の飲食五菓等の

普く世界を觀玉ふよ
業にて餓鬼に生たり
飲食更に得られねば
腹は大鼓の如くなり
尊者見るより驚歎し
鉢取り食んとし玉ふ
尊者號泣したまへど
慈悲請ひ玉ふ告玉ふ
七月十五日自恣日よ
其威力にて免かれん
甘味を盈に盛り備へ

尊者の母親青提女
牛頭馬頭常に附添て
飢渴に迫て瘦はそり
而も餓鬼趣も有と有
急ぎて飯を鉢よ盛り
忽ち火焰と變じつゝ
救はん方便更になし
汝らが母は罪ふかし
百味の飲食整のへて
尊者教を受けたまひ
自恣の衆僧供養せり

(七九)

其功德よて母ぎみは
餘餓鬼迄も解脱せり
現世福樂未來世は
今の益供の起原なり

●光明眞言和

歸命頂禮大灌頂
二十三字に藏めたり
香華證明ふんじきの
諸佛諸菩薩諸ともに
「へいろしやなう」唱ふれば
説法し給ふ姿たなり

餓鬼趣を出て天人の
されば我等が父母や
三途の苦をば免れん
孝行おもはん人々は

光明眞言功德力

「あんの」一字を唱ふれば
供養の功德具いれり
二世の求願を得示て
唱ふる我等が其儘に
「まかばたら」の大印は

姿になりて來玉ひつ
七世の父母に六親が
是れ此經の功德よて
年々必ず修したまへ

諸佛菩薩の光明を

三世の佛も毎々々
「あばきや」唱る功力には
衆生を助け玉ふなり
大日如來の御身よて
生佛不二と印可して

一切衆生をどくぐく
 此世を掛て未來まで
 「はんだま」唱ふる其人の
 心の違すを開くなり
 數多の我等攝取して
 萬つの願望成就して
 「うん」字を唱ふる功力には
 忽ち淨土と成ぬべし
 極重惡のどをがらも
 餘教超過の御法にて
 南無大師遍照尊

菩提の道にぞ入れ玉
 福壽意ろの如くにて
 いかなる罪も消滅し
 「じんばら」唱ふる光明に
 有縁の淨土に安き玉
 佛も我等も隔てなき
 罪障深きわれくが
 亡者の爲に呪を誦て
 速得解脱と説き玉ふ
 無邊の功德具われり
 南無大師遍照尊

「まに」の寶珠の利益には
 大安樂の身とぞなる
 華の臺なに招かれて
 無明變じて明となり
 「はらばりたや」を唱ふれば
 神通自在の身を得可
 造りし地獄も破れて
 土砂バ加持回向せば
 眞言醍醐の妙けうの
 説く共いかで盡す可
 南無大師遍照尊

●淨土門和讃

朝日かけ……………
 鶴の林しの夜半の月
 説ふく法りの色々は
 もとの悟り又歸る人
 忍ふの山路微かにて
 佛の御世を數ふれば
 末の御法に生れきて
 身の契こそ悲しけれ
 網のうけ繩うさ沈み
 光さるなは如何せん

淨世の闇に出そめて

雲隠れよし別れまで
 八百万にも余りけん
 數すよま多けれと
 外よ求めぬ悟りこそ
 二つの千年早すぎぬ
 澤田の淨にせく水の
 そも空蟬の世の中は
 思ひ定めぬこの儘よ
 さて片原のひと筋よ

順阿法師

山の高根を照すより
 五十の春の花の人
 まよひの里を立出て
 心を奥をたつぬれば
 中々迷ふたよりなれ
 山のさつをの白き月
 深き濁り又濁らるゝ
 明日待可身ならぬよ
 穂の上照す稻づまの
 思ひな絶ぞ西へゆく

御法の門を開きしは
受ればやがて忘れ貝
罪おかしめる人の爲
まけしき悟り開しそ
一聲十聲となふれば
散かふ花も類ひてそ
風待えたる帆を上て
知より外は難波なる
野中の清水埋めれし
色音にうつる思にて
たえぬ光に照されて

十と五とおもきとか
浪に碎てあともなく
渡す河瀬の橋はしら
皆な生るへき道理の
もゆる烟も宛からに
寶の國にうつりける
棹さす力なけれども
みつの心も更になし
元の心のぬるければ
勤むる事は怠れれど
佛も我もへたてなき

幾世も知らず積きて
花咲野邊の蕾すみれ
立し誓ひの末ついで
定まりよける限なる
涼しき風に吹かへて
重き岩はとつむ船も
浪の千里を渡るごと
斯る御法を聞てたに
只めの前の花どりの
おさめて捨ぬ道理の
深き淵れを知ぬれば

愚かなる身も立歸り
雲の迎へを待えつし
すてに浮世の關を越
思は今は程や無らん
不二……………
龍樹菩薩の不二と云
二かと云に二ならず
眞空……………
法爾の心法何ならん
大空の遮那の金言を

●密宗教理和讃

何をか更に憂ふ可き
香を芳はしみ糸竹の
宿る蓮もひらければ

讚

如何る者を理源とす
大日如來の不生とす
法爾の色心圓融し
法爾の色法を何ぞ
法界等の五智なるぞ
眞如の平等空無相

心に染るむらさきの
妙なる聲に誘はれて
月の御顔を見ん事も

一柳 玄淨

天地萬物を出生す
一かと云て一ならじ
無始無終に遍滿す
地水と火風と空大ぞ
眞如の龍樹の卓説で
差別の十界又無きぞ

妙有……

色法心法上々轉

舍那の妙有と示れし

●密宗哲理和讃

「おん」の歸命の言葉なり

五色の光を放つべし

まして我等の色心よ

中央法界体性智

依報正報十界の

種々隨縁の波たちぬ

阿闍如來白色の

色法心法下々轉し

四聖の色心出生し

十界迷悟の有様の

(五色の光)

至心に念誦する時の

山水空氣映發し

争か光明なからんや

大日如來黄色の

森羅万象をしなへて

まかばだらの眞言の

光明遍ねく照しける

六趣の色心出生し

龍樹の生滅門とのべ

所生四曼の相ぞかし

一柳 玄淨

即身即坐そのまゝに

五彩の虹ぞ顯りぬ

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

光明遍ねく照しける

不二法身の理源なり

東はら大圓鏡智にて

ひかり鶯鳴くどりも

櫻梅桃李さくはなも

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

光明遍ねく照しける

冬の景色の寒けきも

膝の方形はら圓形

五輪の塔婆外ならず

煩惱ふくく雲かくれ

煩惱即ち菩提にて

入宗論のありしとき

百日百坐百万遍

不思議は今に新なり

春の景色の長閑さの

北方成所作智

空氣日々陰にこり

此光明のひといろぞ

ひねの三角かた半月

五色の光明我に在り

一念信力はつさせが

顯得成佛いたすべし

高祖大師は即身に

光明眞言となふれば

秘密の教理を信仰し

此の光明ひといろぞ

釋迦牟尼如來青色の

琉璃の氷に霜のしら

されが吾等の身相は

頭面さなから團形の

本來理具のぶつ日が

五智如來の加持と逢

嵯峨天皇の御ときに

五色の光を放たれぬ

土砂も光明輝きて

行住坐臥に怠たらず

眞言念誦を勵みてぞ

● 淨土和讃

夫れ人身は受かたく
御世に逢身の嬉さよ
釋迦牟尼世尊遺教を
四恩は平等に荷負也
正しき道を守り得て
みな此の内に納れる
わきて彌陀の本願を
淨土の聖衆に成べし
又や理念や觀ねんの

五色の光を放つべし

(淨土教會賛)

淨土の教へは聞難し
淨土の教會衆と而は
深く信して疑がはず
また其の上に十善の
命限りにつとむべし
これぞ三世の御佛の
ふかく憑みて念佛は
此本願のねんぶつは
凡夫の智恵の念成す

伏水 菅聞隨選述

此にわれひと文明の
貴とさ人も賤しきも
國王ち、はく衆三寶
因果の道理違ひなき
諸善萬行ことくく
淨業正因と説き玉ふ
唱ふる人は後の世に
學びて悟る事もなく
口にとなる唱名は

凡夫其ま、助くべき
文殊普賢の大菩薩
往生淨土に異りなし
念佛三昧の一すじは
仰きて信する心こそ

このうへ吾人一生は
國の爲には勤むべし
あけくれ明治天皇の

● 唯識和讃

花の朝たの春を見て
いとも悲しく思ふも

法藏菩薩の工みにて
馬鳴龍樹も天親も
凡そ佛けの御教への
勤めは易く理は深し
迷ひの雲霧晴れ渡り
學文技術やうり買も
吾日本のこくたいを
玉體安穩いのるべし

いとも樂く思はるも
その源をたづぬるに

淺きは却て深きなり

帝王大臣賤の女も
悟りの數は多けれど
偕も不思議の念佛と
往生人とは申すなり
各々職業おこたらず
愛してまもる臣民は

荻屋哲公

月の夕べの秋を見て
心一つのなせるなり

心にかなはぬ事有は
 湛へるうしはる玉箒
 出も堤もされくくに
 導びく人は皆みずと
 瑤の臺もまだ足らず
 雲上人もありくくと
 顔回なりと稱へらる
 生れしとても虫は虫
 恵は高し人の身を
 目の前に見者の身も
 喜ぶ者のある所以は

あるは怒りあるは又
 掃ひつくすは酒の能
 降つゝ又も闇の夜の
 云も道理は河原にて
 黄金の履も重からず
 面を出されぬ盗妬も
 人もあり蜂蜘蛛百足
 鳥の中にも物いふは
 育て上げつる嬉さよ
 かくも色々隔てられ
 其の源をたづぬるに

憂ふる事もありを海
 玉成涙のはるくくと
 雨はおそろし柳かけ
 一夜を過す乞食あり
 左右の手弱女媚を成
 われは聖の道行ける
 中にも龍は頭らそと
 鸚鵡と聞けば父母の
 天と地との間だには
 あるは悲みあるは又
 心一つのなせるなり

嗚呼心こそ本なれや

● 大 乘 十 報 和 讃

位ひ貴とさ其の人は
 憍慢多き其のむくひ
 利口發明なるひとは
 忍辱つよき其の報ひ
 常に病身なるひとは
 誹謗かけ口せし報ひ
 長壽無病の其の人は

● 観 法 和 讃

法の御山のさくら花

嗚呼本なれや心こそ

讃

禮拜厚つよき其の報ひ
 福徳圓滿なるひとは
 精進かたき其の報ひ
 無病息才なるひとは
 不信心なる其の報ひ
 貧窮困難するひとは
 慈悲善根の其の報ひ

(法のみやま)

昔のまくに香るなり

下賤で貧乏なる人は
 善根なせし其の報ひ
 愛敬せらるゝ其人は
 信心深き其のむくひ
 盲目啞になるひとは
 慳貪邪見の其の報ひ

道の教への跡とめて

高き教への春を見よ
浮世はゆめを短夜と
昔の儘に照らすなり
法のみやまの白雪は
深き教への跡を問へ

法のみやまの郭公
驚きさます聲を聞け
おしへの風の胸の雲
昔のまゝに積るなり

昔の儘に名のるなり
法のみやまの秋の月
拂て真如の月を見よ
身をも捨つる踏跡て

● 西藏佛教和讚

遙か西方極樂國
神聖非凡の王土なり
死行くニツの眼にて
彼土に女人や穢身無
光りとともに映現す

念佛行者の福徳地
御名を信樂せん人は
拜むは本師大法王
新生菩薩は悉く
阿彌陀佛の膝下とに

川上貞信譯
阿彌陀佛の領し玉ふ
未來は福土に生す可
及び眷屬大聖衆
金剛寶蓮華より
侍べる无上の光榮は

又他に何を求むべき
意ろのまゝ、顯現す
我等行者は夫れ故よ

さるに微妙の飲食や
十方諸佛は皆どもに
かねて安養御淨土に

稀有の寶衣や供養盆
極樂淨土を稱讚す
往生治定と安堵せよ

● 聖徳太子和讚

稽首大悲觀世音
攝利拔濟難思議
玉の姿たいつくしく
乳母の教に寄すして
馬飼童子に相まじり
座をかり庭に跪つさ
恭敬禮拜せしときぞ

隨類應現爲太子
誕生し玉ふ砌りに
身より妙なる香を芳
東に向て手をあわせ
形をやつして在すに
救世觀音大菩薩
人みな驚き悟りける

降伏邪見興正法
光明西より來りいり
始て二つになりし春
南无佛とそ禮しける
百濟國の賢聖僧
傳燈東方粟散王
中にも日本國のうち

佛法傳らさりけれの
佛法逆する臣ありき
提婆達多に異ならず
逆心愈々熾盛にて
守屋か誓願空しくて
かたさに勝と誓でし
佛法聖代加護せしむ
碩學名徳もんをわく
天花其地ふふり下り
法華の文字を糺んと
昔の持經を取にやる

法水普くそゝかんと
其の名の守屋の大連
佛經堂塔僧尼等
邪正の闘ひ盛んなり
ついに四王の降伏に
験にたてたる天王寺
推古女帝の御前にて
甚深奥義くもりなし
帝王いよいよ信を増
妹子の臣を使ひにて
妹子か渡せる經卷の

上宮門にそ出たまふ
佛事に障を成すとの
焚燒失滅流毀せしめ
太子定慧の弓箭に
即ち命を襲はれき
我朝最初の伽藍にて
勝鬘大乘講せしに
講經終りし夕べに
大臣公卿たふとみき
大唐衡山般若寺へ
わかたに非と示てぞ

夢殿御戸を閉たまひ
玉の机えに經います
およそ入胎より始め
遠近見さく隨喜せし
十方如來の祖師成り
娑婆濁惡世の无畏主
西方淨土の東門に
舍利を納て生を利す
斯等の因縁さく人の
无缘大悲の能化の主
願共諸衆生

七日七夜音まさす
慧慈につけて宣ひく
慈眼隠れたまふまで
本是正法明如來
誰かの所化に在らむ
普賢塵數の世界に
當る靈地をしめ玉ひ
日月廻りて西に入る
同一淨土に生るべし
一言讚るを縁として
往生安樂國

八日といゑる曉きに
斯經昔の所持なりと
多くの瑞相現してぞ
釋迦に慈氏にも本師也
安養界に補處の尊
和光同塵さわりなし
誓を發して寺をたて
淨土を勸むる指南也
歸命頂禮觀世音
引攝必ずたれたまへ
願共諸衆生

値遇觀世音

●天台大師和讃

歸命頂禮大唐國

一乘妙法のべたまふ

妙慧深禪身をかさり

人より異に御座して

生年七歳なりしとき

普門品をもつてし

残り誨る人なくて

大弘願をおこしてそ

佛を禮拜せしはどに

天台大師能化の主

眉の八采あいわかれ

佛に幾んど近かりき

臥ての必らず合掌し

好むて寺に詣すれの

一度聴き得てしかり

獨り暗にそ了りよき

比丘となりて正法を

風か又夢の如くにて

佛の使ひと世に出て

目のに重瞳相うかひ

嬰兒の間だの瑞相も

坐ての定んて西又向

諸僧口にさづけしは

永く忘れす成にけり

長沙の佛の御前にて

荷負せん事を誓てし

定光菩薩まねきてそ

向後鑑みて教へける

二十歳にいたりてそ

師友をたづね訪ふと

むかし靈山淨土にて

來れるなりと宣玉ふ

二七日にいたりてそ

金字の小品講せしに

文字の法師百千萬

説法最とも第一なり

法華を弘宣し玉ふに

王侯相將あつまりて

年は十八なりしとき

具足戒をの受たまふ

大蘇山によぢのはり

同く法華を聴しかの

すなはち普賢行法を

法華三昧得たまひし

三三昧と三觀智

力らを合せて尋るに

晝夜に流瀉し玉ふに

梁陳舊徳みなさたる

語黙の益を蒙るもの

果願寺にて出家なし

禪悦心にふかくそみ

南嶽大師に見へしに

宿縁杼すこゝにまた

教て修せしめ玉しに

受法の大師に相代り

是計りをそ問ひ受し

辨才海の渴きもせし

瓦官寺にて八ヶ年

一日朝儀を停めてそ

濟濟として有しかの

徒衆轉たおほくして
生ねん三十八にして
其の山嶮く高くして
八重子一ツか如なり
西には重山連なりて
瀧水落てぬのをひく
白道猷かふるさ室
昔の夢にことならず
樹を植菴を造りてそ
後夜に坐禪し玉ふに
明星漸やく出るとき

自行の障と成けれぬ
宣帝留めたまへとも
一萬八千丈餘なり
東の滄海はるかにて
大無き境に入にけり
鳳鳥鸞鳥とびかけり
王子晋かもとのわと
すまのち定光菩薩の
始て宴坐したまひし
天魔種々なやませと
胡僧形ちを現じてそ

陳の大建七年に
天台山にそ入たまふ
周りの八百餘里に而
蓬萊方丈とほからず
石橋巨りて虹の如く
銀地金地に分れたり
一一廻りて見玉ふに
港より北に地を下て
其の後華頂峯にして
降伏し玉ひ竟りにき
自行化他に今よりの

影響せんと誓ひてし
宣帝これを聞しめし
衆の費へに充たまひ
浄名經をかうせしに
澗に琳瑯布みてり
子雄奔林なりしかり
黎民漁りおほけれぬ
水性悲むのみならず
衣物をすてし買取し
一時に法池と成こそ
限あること無けれぬ

そのうち菜色相現じ
勅命俄かに下してそ
兩戸の民を除きてそ
みささの前に山現し
梵僧數十手ことに
講堂改めつくりなき
體骨は積て岳となり
舟人危ふみ多けれぬ
湍潮わたりて三百里
流水品をそ講しける
昔しの野生池よりも

僧衆縁にしたかへの
始豊縣のしらべをり
薪水に役し玉ひける
嶺に瑠璃映とほり
香爐を捧て出きたる
山のふもとの巨海に
蠅蛆の鳴聲雷同し
慈悲を廻し玉ひてそ
鷹梁あはせて六十所
財施法施の二功德も
此をそ勝て覺へける

陳の太子永陽王
観音懺を行せしに
これによりて生々に
仁王般若を講せ玄に
論議のふゆの氷にて
赫々として消にける
大師の名譽是よりそ
菩薩戒をうけたまひ
所有の施物六十種
分ちて還り玉ひける
一夏の間に敷揚して

狩して馬より墜玉ふ
梵僧眼に見へけれ
大師に仕んどの云し
諸僧勅を被むりてそ
眠々と結て堅けれを
主上潜涕したまひて
愈天下にみちみちる
徽號を大師に奉つる
一ツも留め玉すして
生年五十七にして
朝暮二時に悲誦はす

殆んど絶るに及はど
痛む處も止みにけり
大極殿のうちにして
激難鋒をさそひける
解と夏の日に似てそ
起て三度を禮しける
隋帝齊會を設けてそ
智者との此より申也
悲田教田二ツにそ
摩訶止觀を説たまふ
止觀一部の此大師の

已心中の法にして
大師雅きより泉石を
請し下したてまつる
人跡久しく絶てこそ
俄かに沙門相あひり
一時月の夜静かにて
終を告るよ成にける
石城寺にいたりてそ
辯才恒より妙にして
十如不生十方界
いちち法門相攝す

法華を人よ知せんと
好て隠居したまへと
凡そ十二ヶ年を経て
竹樹林どの成にけれ
眉鬢もしろくして
人と語ふけしきあり
隋帝切りに請すれの
遷化の場所と宣給ふ
聞もの涙を流してそ
四教三觀四悉檀
智朗禪師か問しかり

名字を易て説たまふ
陳隋二帝あひつゝ
舊居に還り玉ふそ
山の半にいたるほど
逡巡りてそ隠れける
胡僧再ひげんじてそ
山より下り玉ひつゝ
最後の説法し玉ふに
憂の海にしづみける
四諦六度十二縁
位あり第五品にして

観音來迎したまへり
隋の開皇十七年
其の時風雲相さひき
相劣らしと悲しみし
容顔變することなく
龕を開きて拜すれり
齋の場にて敷ふれり
もとの數に異ならず
多くの功德の其中に
うつせる經の十五藏
傳教學士三十人

淨土へ往と宣たまふ
仲冬二十四日なる
草木うなたれ水咽ひ
龕より外に打たつる
身より汗をを流し息
堯眉舜目うるわしく
千一人を餘りにき
およそ大師の一生の
少の功德これ云へり
金檀畫像十萬軀
修禪學士充ちみてり

そのとき生年六十歳
未のときに滅し玉ふ
沙羅雙樹の昔しにも
道俗拜みたてまつる
遠忌に至る時ことに
鬚髮生ていましにき
名字を呼て黜すれば
所作の行業多ければ
つくれる寺の三十五
度せる僧衆四千人
およそ五十餘州の内

道俗其數しりかたし
一言はむるを縁と而

傳教大師和讃

南無傳教大師吾朝の
彌ねに中堂講堂を
南岳天台相承の
本具の性徳明らか
大願力よすがる身の

慈覺大師和讃

歸命頂禮比叡の四祖
いみな圓仁俗姓の

大師の徳業量りなし
三會に必ず値遇せん

讚

無し桓武の御願にて
陀て國家を鎮護せり
無明を照す圓頓戒
傳へ給へし果報こそ
師の恩忘るゝと勿れ

讚

慈覺大師の別傳を
壬生と聞ゆる下野の

心も言もあやめれす

北村 忍道

阿らたに開る比叡山
佛法王法ひろめんと
根機相應顯密禪
教化普く都鄙に充つ

釋て少しく記さんに
都賀の郡の産にして

崇神天皇だいいちの
誕生日の嘉氣を見て
としこれ九歳母公の
經藏中よちかひての
大旨を稍く悟りける
是の叡山の大師ぞと
開山大師に屬しける
常に謹しみ事ふれば
世人未だ解せざれば
文義の骨髓授かりて
弘仁六年沙彌となり

皇子の苗裔成とかや
大慈寺廣智の此兒を
前語を慎み付屬しぬ
觀世音經さぐり得つ
ゆめよ一人の大沙門
示すを聞て慕ひしき
大同三年十五さい
鍾愛ふかく止觀なる
汝ら此義を流傳して
聰明年少十が中
翌年受具して執小の

ころの延暦十三年
予に與よと約せしに
性質聰敏丈五しやく
頻りに修齋し内典の
笑を含てものがたる
意を廣智の知ぬれば
夢相よ違ぬ師を仰ぎ
眞俗二たいの不生滅
圓意弘通せよかしと
たゞ一人ぞ領知しき
師の歎なれば明の春

圓頓大戒をぞうけし
四十に及んで身も勞
終りを待はと練行し
四種三昧を偈行して
時に先師の夢告にむ
舟中辛苦を慫れめり
大使藤の朝臣と
危きこともおほかりて
府中の開元寺に入り
普く寺僧に與へてぞ
悉曇梵學研究し

その後誓て扉を閉つ
我命久しからじとて
天の妙藥ゆめに得て
如法堂をぞ造りける
入唐求法せしめてん
果して請益救ありて
太宰府よりぞ禮を解
開成三とせの七月よ
節度使監軍立かひり
其の一分を領しける
全雅阿闍梨よ金頂の

一行三昧修しぬれば
幽かに閑けき北洞に
道標たちまち健かに
此頃遣唐使をえらぶ
但浪風にたゞよらん
承和五年の六月に
万里の洪濤楫を折り
楊州海陵縣につき
惠施する絹の十余匹
上都の高僧宗叡に
灌頂曼荼羅相つたふ

早くも四年歸期至り
宿願遂んど身を抽て
慈心を起して送ける
冥護を赤山明神よ
かくる秤子を買得る
新羅の張詠會てわが
持來てなぐさめ奉る
副使も盛騰供養しつ
五臺山よのぼりての
北たいにての山上の
普通院の房より

海上たちまち逆風に
東海縣よといまれば
第二の船も風あじく
こふて本願成せんと
夢見て無上の法門を
國恩ありと宿望の
刺史の旅糧を施しぬ
判官蕭慶中よりぞ
諸徳に謁して主客共
雲霧がなかに一隻の
五しさの放光祥雲の

吹れて海州界による
日暮しみちを海賊も
又登州へふさもどす
祈れば或夜又大千を
得べき験しと歡びぬ
聖跡巡禮ゆるしふみ
龍興寺にいたれるに
禪法門をつたへける
互ひ又文殊と疑ひぬ
可畏の師子こそ顯し
師の頂上を照せるを

數十の僧見て驚歎す
南臺よみての聖燈の
この感應の故とかや
奏て元政阿闍梨よぞ
並に蘇悉地傳へける
九佛頂を圖せしむる
立法寺にて法全の
五百五十有九くわん
そののち南天寶月や
會昌天子の破法にも
大夫等いはく唐土の

志遠和尚に台教を
普く照すを見玉ひぬ
八月長安城にして
金灌うけつ明年よ
刀子を得る夢により
畫工の怠り怒りての
阿闍梨に儀軌を傳習
兩部曼荼羅舍利道具
城中衆徳も祕局をハ
先師の冥助厚けれや
佛法和尚も隨がひて

三十七卷傳寫しつ
文殊閣のち造りしハ
上將軍の仇士良
義真も從がひ胎灌頂
五臺の文珠の守護知
金剛神ぞせめけらし
六年の間だも諸經論
二十一種ぞ得玉ひし
惜まらず爲に指授し
容易く歸國の牒至る
東に去るとぞ嘆ける

有夜のゆめに達磨等
商船にてぞ進發す
こんねん唐の大中元
嘉祥元年めでたくも
僧徒は雲と集合りて
件の法を修すべしと
津梁なりとぞ記ける
聖筭むりやう法燈の
檢校參議善男にて
熾盛光佛頂をこそ
五臺の念佛寫しては

諸祖の擁護の告を得
みのりも早き秋の空
わが朝承和十四ねん
洛陽の春の花ころも
隨喜にたへず灌頂を
大法師位の位記賜ひ
としの三長齋に屬さ
絶ぬ修行に内藏寮の
三昧耶戒者は千餘人
最勝なれと奏しつゝ
常行三昧始行せり

心たのしき春かせに
筑紫にこそは著に是
殊更旅懷を勅もんす
わがたつ所に三千の
ねがへば六月十五日
乃至まことに黑白の
きたる五月の甘露日
千僧くうを勅賜あり
太子踐祚の除災には
惣持院をこんりふし
仁壽四年に座主と成

金剛頂經蘇悉地經
曉夢に日輪射と見て
貞觀元年大内に
續いて都鄙の受戒人
顯揚大戒論めなり
この程熱病患ひてぞ
遍昭所求の大法は
好學輩は經論を
彼士に在し日赤山の
我沒後には樹を植て
要を摘んでこゝに載

おのゝ七卷疏を作
冥感ありて後の世に
徴れて菩薩の大戒を
灌頂男女がつしては
靈石うづみて宿願の
六ねん正月十三日
安惠に受よ門徒等は
他處よな移そ來見よ
神にちぎれる宿願ぞ
唯其しるしを遺す可
黄昏たちまち流星有

佛意如何と祈れるよ
傳はるべしと知玉ふ
法號ともに授けしる
およそ二千八余なり
文殊樓をば造立す
諸弟子よ遺誠し玉く
楞嚴院を修せんせよ
禪院建立せんことは
同志かならず果べし
此の外遺命多かれと
翌ば九弟子の一道は

房中音樂あるをきく
大毘慮遮那佛四親近
稍子の刻にいたる頃
とさよ春秋七十一
正月十有四日よて
喜怒をば色に形さず
難厄凌ぎて窮めしは
慈覺大師と賜はりぬ
開縁は靈体在まざる
一履を携へ下り來て
また同州の七所にて

大師は諸事を辨了し
每名侍者に誦しめて
北首右脅に而こそは
夏臘は四十九年よて
知も不知も悲惜せり
身は滄溟を渡り得て
佛の護念ぞ深かりし
あるひは上足承雲は
この日日光山堂の
その慶導を勤めごと
同時に說法即日

すなはち淨身香を焼
自ら彌陀を念じつゝ
永く遷化し玉ひけれ
じつに貞觀六年の
大師天性寛柔に
三密一乘みなもとを
八年七月おくりなを
棺上隻履のみを見つ
落成又師は虚空より
後に傳へて聞えけり
羽州立石寺の龕に

宴座し玉ふとも云り
仰げば心も及ばれず
峯雲たよよふ末學の

●弘法大師和讃

歸命頂禮遍照尊
屏風がうらに誕生し
五の獄にたつくもの
末の年なる五月より
えるしを殘す一本の
眞言宗とぞ名付たる
凡聖不二と定まれど

嗚呼奇なる哉妙也や
慈顔の月は隠るとも
谷水むせぶ羅語軟語

讃

寶龜五ねんの六月に
御歳七つの其の時よ
たつる誓ぞ頼もしき
藤原姓の賀能等と
松の光を世にひろく
眞言宗旨の安心に
下根に示す易行に

もとより觀音應迹と
眞鑿たへせぬ光風に
第一義空に歸し給へ

玉藻歸るてふ讚岐漁

衆生の爲に身を捨て
遂ますなはち延暦の
震且船にのりを得て
弘め玉へる宗旨を
上根下根の隔てなく
偏へに光明眞言を

行住坐臥に唱ふれば
 不轉肉身成佛の
 忍土をてらす遍照尊
 結ぶ縁しの蔦かづら
 野山の草木みな枯ぬ
 甘露の雨を降してり
 功の今にかくれなし
 金口眞説四句の偈を
 わびたれがつれならむ
 何なる無智の稚子も
 知れば知る程意味深
 宿障何時か消はてし
 身の有明の苦のした
 仰げべいよ高野山
 絶りて登る嬉しさよ
 其の時大師勅を受け
 五穀の種を結びしめ
 わが日本の人民よ
 國字又作るみじか歌
 うのむくまはふこえて
 習ふに易さ筆のあと
 僅かに四十七字にて
 往生淨土さだまりぬ
 誓の龍華の開くまで
 雲の上人しづの男も
 むかし國中大ひでり
 神泉苑にあまごいし
 國の患ひを除きたる
 文化の花を咲せんと
 いろはにほへさりぬるを
 あさきゆめみしあひもせず
 然共總持の文字成ハ
 百事を通る便利をも

おもへば萬國天の下
 五穀豊熟富み貴き
 殊に見目も淺ましき
 寄て利益を成し玉ふ
 生死の苦海果もなし
 弘誓の船又機械取り
 南無大師遍照尊
 弘法大師山開和讃
 多度の郡は屏風か浦
 大師の御父佐伯公
 お假なされて御出生
 なはも誓のその中よ
 息災延命且易産
 八十八のゆるせさに
 繫がぬ沖のすて小船
 爰に三地の菩薩あり
 不思議の世々に新也
 南無大師遍照尊
 天台沙門 馬場道海謹寫
 御夫婦中も睦まじく
 御臺所のあこやの前
 寶龜五ねんの水無月

寅の年月をいひたる
 梅檀山はすてたまふ
 御山に幼子の契聲す
 傍へ立よりをん顔を
 是只人にはよも非と
 御時しんふ經ひらき
 三ツのときは三部經
 助んが爲身を捨てし
 一度四國を廣めんと
 其の時あさの御衣に
 たけの六寸幅二寸

中と五日の寅のこく
 其時梅檀山の樵夫か
 幼子の聲の法華經を
 拜しもふせり日月の
 袖よつしみて連歸り
 ニツの歳に二部經を
 五ツのときは諸々の
 岩谷山よたちこもり
 廿一才のおんどきに
 綱代のかさにかい俵
 表に奉納四國八十八ヶ所

あこや御前は確たる
 通り掛はコハふしぎ
 讀誦するかと思れし
 御身は佛の如く見ゆ
 育てあくれは一才の
 よみ開きたまひたり
 御經を讀て世の人を
 晝夜學問なされたり
 初めて四國を廻れし
 首に掛たる札はさみ
 同行二人と記したり

うらには三界万靈を
 左りの御手に百八の
 山谷島ののほりをり
 四百八十八里なり
 四百八十八所
 如何なる業病難病も
 啞の高々念佛し
 壁へ貧苦に暮らす共
 た一心に札所に
 朝日の瀧の濁らいや
 野宿なされて熊野町

御手に手たい尻附に
 煩惱の珠數御手に持
 南無大師遍照金剛と
 越されし川の四百と
 今こそ救ん世の者を
 藥師如來の藥りにて
 つんばの耳も善聞系
 昆沙門天の寶らにて
 手すから札を納置き
 一本松やここのみづ
 百丁のばれの岩間山

脚伴甲懸なかそうり
 右には金剛杖をつき
 御廻成れた道かすが
 八十八難阪難の
 遍路回國なすもの
 いざりの車を乗納め
 胸の曇りも晴にて
 金銀財寶さすかりて
 二重菩薩や穴はりの
 晝寐を致り十夜の橋
 是も岩屋の験たかな

飯難除のまもりうけ

廿一號のはりつめ

不食の具に不食芋

ゆるきり石の龜も浮

四月の満汐に點燈松

今日の人の野邊姿た

一人冥途の旅たちそ

たゝ一遍の御眞言

イテ頂上へ登らんと

登り岩屋に阿彌陀佛

年よ三度の栗もなる

石の鳥居も半ば出来

龍宮松やそのはかに

最し可愛の妻子でも

死出の山路や三の川

南無大師遍照金剛を唱ふべし

金のくさりや階子阪

百丁下のすかわさん

人の心ろもかたみ岩

犬の小石にこまの里

不思議利益も有かし

三寸の息たつときば

菩提の爲と思ひなば

●弘法大師いろは和讃 (法の初音) 古徳快範述
歸命大師遍照尊
和げいろはとなし玉

釋尊涅槃の四句の偈
作も尊さこのふみを

和國民族も教へんと
頭らの文字も戴かせ

法の初音と名付つゝ

佛祖のとくを讃歎す

(い) 徒ら毎に日を重ね、(ろ) 六趣流轉の種を時、(は) 墓無此世を過なり、

(に) 人間生を受べこそ、(ほ) 佛に成り今なるぞ、(へ) 片時も頼め信ず可、

(と) 兎角此世の夢の世、(ち) 塵に交る憂き身成、(り) りんき腹立悪て、

(ぬ) ぬらくら飾悪業も、(る) 累積終に山となり、(を) 己れと下る三途川、

(わ) 我が成業の報なり、(か) 必ず他人を怨まじ、(よ) 世も長らへて電の、

(た) 唯一生の夢の世ぞ、(れ) 連理と契妻や子も、(そ) 其も暫時の情なり、

(つ) つくぐ思へ我心、(ね) 念々浮世も羈れて、(な) 南無と頼ともなし、

(ら) 來世との馬耳の風、(む) 無常の嵐は何時と、(う) うそをばし云と疑て、

(る) 今の今迄日を暮し、(の) 望はすべて後の爲、(お) 思は我身が恨しや、

(く) 苦勞の中に嬉さり、(や) 闇路を照す御佛の、(ま) 末世の衆生を憐て、

(け) 化益に廻御慈悲は、(ふ) 淵も山にも譬し難、(こ) 廣大無邊御化導に、
 (え) 縁じ逢身ぞ有難き、(て) 天上天下を指して、(あ) 徧く衆生を諭ける、
 (さ) 然乍遺法受し身は、(き) 歸依佛法僧三寶を、(ゆ) 夢よも唱へ奉つれ、
 (め) 迷悟の心の花成べ、(み) 彌陀も羅刹も現る、(し) 信心こらし念す可、
 (あ) 永離三途の誓願は、(ひ) 徧に曼荼羅一見を、(も) 求し縁の功德なり、
 (せ) 定口稱の徳あらば、(す) 直み淨土入ぬ可、(京) 京九重へに咲花の、
 (上) 上品蓮臺疑がわす、(一) 一心決定する人の、(二) 二度と六趣に迷じ、
 (三) 三界火宅の世を遁、(四) 四生の憂き身を去、(五) 五蘊皆空悟り得、
 (六) 六通自在の身を受、(七) 七珍萬寶かざり立、(八) 八葉花座に打乗て、
 (九) 九界の衆生を濟と、(十) 十方世界に徧滿し、(百) 百億無量の法藏を、
 (千) 千差萬別説よりも、(万) 万荼羅一度開見の、(億) 億劫作善の功德也、

(北) 氷世の願方身に染、(南) 南無と唱る一聲に、(無) 無量の罪も消滅し、
 (大) 大安樂の身と成も、(師) 師の御恵み深き故、(遍) 遍法界を悉ごとく、
 (照) 照見有し御祖師の、(金) 金剛不壞の大定に、(剛) 剛扉を永く閉給ふ、

弘法大師即身成佛和讃

嗟峨の帝の御時に	高祖の御年三十七	花の都の雲のそら
眞言宗旨を弘ける	護國利民の御法也	即身頓悟の宗旨とて
貴賤男女の隔なく	其徳風に靡さける	然と余宗の僧侶よ
氷を疑ふ夏のむし	眞言宗を誹謗して	我慢の角を側立ぬ
爰に天子の勅を垂れ	八宗論をべ開しむ	弘仁初年三月は
十有五日の春の空	清涼御殿の奥深く	籬の涼しき其中に
帝の玉坐の最と高く	静に叡開し玉へり	俱舎よ成實律宗の

三人何れも着席す
天台宗に圓澄を
右の席へと坐を占て
俱舎も成實律宗の
持戒堅固の劍をぬく
第十秘密に敵すべき
恰も彌勒の威を示し
後よ來るの三論宗
羯る鳥だも落とす
一心三觀論をたて
恰も普賢の威を示し

法相宗に源仁ぞ
華嚴宗に道雄ぞ
威風堂々けだかくも
三世實有の旗をたて
大師の驚く色もなく
阿字の一刀斬ふせぬ
五重の唯識義を談じ
恰も文珠の威を示し
右に來るは天台宗
枯木に花が咲如し
十立六相の理を述て

三論宗に道昌ぞ
名僧智識の凜然と
論鼓の鳴を待玉ふ
毘曇空理の鼓を鳴し
四五の住心何のその
前に來るの法相宗
懸河の辨の流れる
八不の正觀とさ明し
恰も觀世の威を示し
左よ來るの華嚴宗
獅子の吼るが如なり

大師の四面に敵を受
第十秘密も及んや
七宗何も顯教ぞ
即身成佛目の前ぞ
文證道理が極成し
現身作佛の有様を
正しく南に打むかひ
秘密の明を口に誦し
顔の乍併しるさつき
七寶蓮華のわき上り
紫磨黄金の佛身を

蟻が逼るか鐵のしら
大喝ひと聲潔きよく
經劫作佛の外なし
二經一論八箇のもん
論場靜肅聲もなし
清涼殿裏に顯はせと
端身坐禪を組玉ひ
阿字眞理を意に觀し
眼即はち青さす
大師を空よさし上て
顯玉ふぞ不思議なれ

六七八九の住心の
顯密二教を決判し
それ引替へ密教の
六大三密四曼の理
時に天子の聲たうく
勅を受たる大師に
智拳の印を手に結び
三密こゝと調へば
五佛の寶冠舞ひ下り
光明遍照かゝやきて
殿上殿下の唯金光

水鳥樹林も皆な法音
天子の玉坐を飛下り
有り難涙に咽けり
暫くありて遍照尊
恭敬賛歎限りなし
三密五智の法のみづ
一天さへて限りなし
元亨釋書に到るまで

●弘法大師和讃

密嚴華藏の有り様を
遍照尊と手を合せ
夢かと思に夢ならず
もとの形より玉ふ
天子の眞言宗となり
四海は流て果もなく
四條御院の官符にも
此事詳しく記したり

(日本の寶)

此時始めて拜しぬる
百司と百官地に降り
前後忘れて唯茫然
滿場何れも夢さめて
七宗何も弟子となる
六大四曼の法のつさ
鳥羽御院の官符にも

高志調惠作

玉藻歸るてふ其島の
奇瑞ははかに簇りて

靈氣の内を覆いけり
日本開化の先導師
三地さつたの靈蹟の
木樹の梢に啼く禽や
社會の福利を一筋の
誓いを立つる祥雲の
ほどけと語る發心の
學の道よ身をゆだね
眼に觸耳に聞く物は
歸命頂禮遍照尊
海よりふかさ母の徳

阿刀氏の妊身十二月
俗姓佐伯の直へにて
皇土の光を留めたり
四方の野末に咲花の
意の駒にむちうちて
五の岳にたなびきて
門出は遙か有爲の里
業成り道は進むれど
あわれ無情の鏡よて
ころの延暦十二年
阿耨菩提の其の爲よ

誕生まします御方の
幼名眞魚と稱しけり
齡の七歳の其の時に
無想に動く有爲の心
我身を衆生の牲犠と
八つの蓮すに因縁を
延暦七年とし十二
出家の志くわはりて
修道の望は盛んなり
山よりたかさ父の恩
情のあつと親を辭し

別にし郷を後にして
入にしのちの身姿は
綴り出せし三教指歸
朝な夕なに修業して
究めて諸佛に誓てし
うちに秘經の七卷を
千里のみづに心なく
藤原姓の賀能等と
風は烈しく波あらく
縣の濱邊に付みけり
渡唐の慈心を知せて

いつか和泉の槇尾の
昨日又變る無空沙彌
儒佛道のゆるれつを
天台花嚴の教理より
祈る神祇の守護有て
感得せられし其時の
一帆のふねに意あり
船を共みし波まくら
危難ををかし八月よ
藤原大使の書を載し
船をあらため船人を

霧立ちのほる山寺に
威儀の整い戒を受け
指示而僧家の本懐を
法相三論の深旨まで
名に高市の久米の塔
渡唐の機縁の熟し鳥
未のどしの五月より
據る邊渚のすて小舟
唐の福州長溪の
縣の長官又捧ぐれば
囚へて警しむ有様に

大使大師を監せられ
身の巧妙の筆を執り
況して縣の長官は
龍顔親しく勞を慰す
西明寺にうつりけり
偶たま回り遇ふ聖師
譽れの高き貴とけき
不空三藏上足の
綾なす文の意中の圖
月にむら雲花にかせ
淺き智識の珍賀沙彌

浮き事のみ積る身の
寫せし響く悲哀の音
其とも知らぬ後悔の
唐の永貞元年の
辛苦艱難あさもせで
處は京のかたほとり
惠果阿遮梨の大徳の
不二の妙理を究ける
舉動の人の心のはな
才を羨やみ智を嫉み
心ろて呵責の四天王

厄をのがれて有爲の
有情の人の感すへく
江南道よあんないの
二月十日に救に依り
西にひがしに跋渉し
青龍寺中の東塔院
秘密傳燈第六祖
人に師事する遍照尊
わけつろふ事香り成
修行の街を妨たげの
造り出して身を焦す

不思議加護も法の爲
化縁の油の既に絶へ
弘る時そたのもしし
別れを惜む菩提子の
海路遙かの彼方より
法身如來の直説よ
若感應の地ありせば
老るしを殘す一本の
千歳を經も變らざる
高雄の山の神護寺に
八幡神の託を受け

惠果の時を悟り視て
なんじと我の宿縁の
秘密の檀は香ばしく
慈悲の念珠を懸けに
密かに誓て言れける
佛法最甚秘處ありき
汝の先きよ導びけと
松の光りを世に廣く
之も御法の貴とさよ
移住し玉ふ此の庵の
寶龜の五ねん建立の

兩部の秘法を授たり
譬は日本の野や山よ
灌頂の臺の朗らかよ
唐土を辭て船を懸す
學ひし所ろの教法の
弘傳もどより所あり
投しの秘器三鈷の杵
高野の峯も雲ふかく
大同四ねん救ありて
正邪を和氣の清磨が
伽藍の永く榮へけり

法の海原かぎりなく
啖い亡して身を壞ち
弘仁初年に撰はれて
甚深無上の妙法を
其山門に弟子を集せ
授けて國利を謀り息
夜は光彩でんを衝く
施與を受なす斯雪峯
金杵は四方に光なし
眞言宗となりにけり
異るの法の道しるし

貪瞋痴憊の鬼かすみ
苦惱になげく諸々の
東寺の居住と成に息
修行に帝都の鎮護爲
一七にちの祈禱して
今の高野の其の往昔
老松古杉の生茂けり
仰さて觀れば忽然と
登りてうれし我庵を
天台祖師の最澄は
兩部の灌頂授けしも

正義の順風よ行人を
救護の船に慈悲の樞
秘密傳燈の道場に
又或る時の高雄なる
仁王しゆこの兩經を
晝の瑞氣の簇をこり
丹生津の姫神假住居
まなこよ映る松頭の
結ひし縁の榮へ來て
交わり厚つく學同し
心にへたてなき法を

擴むる人の績をしと
疫癘流行戸々うれい
心經一卷書寫のうへ
諸縣に洽ねく顯れて
額を改ため書を書ふ
南のかたの大師なり
日本進化の基いなり
四方に擴て化を佐け
菩薩利世の好方便
三摩耶戒を授け奉り
皇帝灌頂の嚆矢なり

後の世迄の龜鑑なり
惱み賜いし皇帝には
衆生の業垢を清んと
深く呪力を賞しける
西北二門は嵯峨の帝
譽をどしむ日の本の
兎の毛猪の毛を取集
或は万農池の塘み築
天皇深くしんにんの
太上帝も入場し
眞言密家の安心の

弘仁九年の春のころ
嵯峨離宮に行幸され
秘關を開き感應の
弘仁九年の宮もんの
東のたちはな逸勢に
三つの筆蹟鮮やかに
自から製せし筆の法
時には市を開きしも
大師の國師の禮を受
灌頂の法位を受玉ふ
即身成佛の教義にて

凡聖不二の易行あり
聞くも清涼を殿上に
説きて其身は三昧に
斯の宗義を求むれり
之ぞ大師の著述にて
早魃日々に打ついき
澤邊やぬまり龜裂て
帝の震襟を惱まされ
轟々鳴りし雷づちは
四方よ嘆きし民草の
大師の祈雨の一七日

法相三論の聖師等の
金言戒意の法るんも
住して現はす現証も
十住心論二教論
深義は筆よ綾をなす
野にの全き草もなく
暑熱の蒸にハチルン
西寺の守敏の請に依
京城よ暴雨の降し耳
色香は將よ絶なると
瑞氣の四方よ立起り

疑團の胸に結ばれて
巧みよ不二の妙道を
貴とさ法の功德なり
寶鑰三卷即身義
天長元年はるの野の
山よ濕をふ谷もなく
増して貴き人は死し
一七日のあまこひよ
瀧ぐ所ろの猶狹まく
聞へて救を蒙むりし
沛然くたくす甘露水

神泉苑のあまこいと
他山の石のみがく玉
國家を守護の講苑の
法を修めて福を増す
各宗一致に組織して
京師にたてし大學校
國の柱と成さんため
勝も得られぬ天の數
忽然現して和する僧
情けを弟子に誡めり
師が眷愛の恩よ泣き

世に口吟む此の時よ
日々又輝く法の徳
仁王護國般若經
大聖利世の慈悲の心
儒佛道の三學の
其の名綜藝種智院
築さし績し遺りけり
僧都の職を辭し玉い
をいを高野よ入定の
賢きさ方の御名残り
惜別の涙に咽ふもの

守敏の妬嫉の日増も
天長二年十九二月
一百獅々坐八百僧
一千余年の其の往昔
片言隻字さづけんぞ
學びの庭に生成ちて
大徳智識も病氣に
迦樓羅定に入りし時
教をへ遣す後の世の
世よ廣まりて道俗は
峯を遙かに別け登り

法のをしへを聞く心
夢に夢路を辿るとも
二十一日とらのこく
御姿たの結ふ大日の
南無大師遍照尊
文化の花を咲せんと
國字をつくる短うた
然共惣持の文字成ハ
万事を廻る便利をも
受けし恵みを想ひ
世を荒磯のすて小船

しとふ聖僧の妙音に
悟りも附ぬ謝縁の辭
をんとし六十有二歳
定印されし其の儘に
わが日の本の人民に
金口の眞説四句偈を
如何る無智の稚子も
知り識はと意の深く
國の開化を一すじに
之皆大師の慈心なり
生死の苦海果もなし

にわかには消る煩惱の
承和の二ねん二月の
はうろう四十有一の
徐に入定したまへり
學ひの園を耕へさし
四十七字に綴られて
傲ふにやすき筆の跡
僅かに易き其字にて
遺りし功いまの世に
悪業深きわれくの
誰をたよりの綱手繩

此に三地の菩薩あり
迎ふる慈悲の我法の

●善導大師和讃

釋迦の淨教弘通する
京師大師に始まれり
東土の垂迹訪らへば
朱司の家に生れての
變相拜して願ふらく
魂淨土に栖しめん
戒香其身に受てこそ
こころの中に以爲く

弘誓の船に櫂棹どり
不思議の世々に新也

讚

論師人師の多けれど
西土の本地を尋れば
三昧開發またおもしろ
生死の境を厭ひつゝ
如何にしてか姿をば
明勝和尚に従ひて
比丘の像となり玉ふ
機教相應知らずして

救濟の眞帆を順風の

正雜二行の分別は
四十八願これふかし
嬰兒の行に形どりて
菩提の道にぞ入に息
はなの臺に託せしめ
翠の髪を剃りおろし
法華維摩を讀誦せし
要行定めがたからん

たゞしの釋迦大悲尊
われに與へ玉ふべし
信手に觀經得し時ぞ
落葉おとを埋めども
夜の霜をいとねば
鷓鴣の背に異ならず
氷をたたく冬の夜も
餘多の年を越ざるに
淨土の行業満しかば
無常の道理を示ける
貪瞋十惡相續起

一切經卷その中に

即ち大藏中又入り
專修の門又入り鳥
專ばら念佛し給ふに
木葉の中に埋もれぬ
合掌しての西又ひき
汗を流して名を唱ふ
觀想疲を忘れつゝ
京師に出て物を利す
從使千年受五欲
豈是解脫涅槃因

有縁の法を撰びつゝ

至心にして經を取り
玄冬あらし荒くふき
覺えず數多の日を送
數返の紅うつろひて
踞跪しての聲をあげ
悟眞寺にこもり居て
三昧開發したまへり
勸化のつねの詞に
增長地獄苦因縁
彌陀名號相續念

化佛菩薩現前行
 高爐山よのぼりつゝ
 西士よ心も澄わたる
 此等の遺範見る時ぞ
 利益ならざる事ぞ無
 破壊の堂塔修造し
 淨名自活し玉へり
 睡眠せずして三十年
 瑞相まことに勝たり
 善導大師の徳行を
 光明寺どがくを書
 或與華臺或授手
 惠遠大師の跡をみて
 瓦に松生ひ苦むして
 いよ／＼心も進ける
 うつせる經卷數万卷
 四種の供養の儀も有
 比丘と共に遊行せず
 愛欲なくして一期生
 彌陀觀音らいかうし
 高宗皇帝たつとみて
 たゞし遺身往生は
 須臾命盡佛迎接
 東林境しづかにて
 碑の文斗りを残ける
 須臾の間だの行相も
 變相書こと數しれず
 釋迦の分衛を學つゝ
 沙彌の禮をも受りさ
 そも／＼遺身往生の
 音樂異香いちしるし
 即ち所居の伽藍をば
 吾等が爲にの過分也

畢命爲期の誓約の
 淨土宗門わがてうに
 著し給ふの大帥なり
 攝取衆生の智門より
 室またくして概じめ
 白旗空より降りしん
 聖徳太子に似給へり
 頂凹みかどありて
 乳母に自名のられて
 ちゝにあたせし定明
 頼てるなを頼むべし
 大師歎徳和讃
 はじめて別に建立し
 仰ぎて本地を誦れバ
 跡を此土にたれ給ふ
 靈夢をしめし誕生の
 八幡宮に似たまひて
 容貌如何も凡ならず
 眼黄にして光りあり
 竹馬にひちらうつ戯も
 小矢もて被射留しん
 立譽上人述
 凡入報土の大利をば
 忝じけなくも大勢至
 受生のもととは時國の
 庭にの寄瑞を現せり
 紫雲異香の瑞相の
 孔夫子に似たまひて
 勢至丸とをさな名を
 西にむかひて合掌す
 譽たかくて世の人の

小矢見君とぞ稱ける
皇山阿闍梨を師と頼
十八歳のあきのころ
叡空道機歎美して
此師へこそ譲れし
碩師に推控し給ふ
論師の化現を給ふか
然りて天下の市街にて
法を得るはいと悲し
教る智識もなき儘に
報恩藏にとぞこもり

父君の遺命守られて
落髮受戒したまへり
名利をいとひ黒谷の
法然房と名づけられ
顯密權實のこりなく
各々所學を稱歎し
唯人にては在さずと
智慧第一と歌へども
靈佛靈社に參籠し
自ら求むる外はなし
一代藏經五かへり

十五のはるは裏嶺の
法華止觀をうけ學び
慈眼房へうつられさ
圓頓菩薩の戒統を
修學成らして八宗の
文珠彌勒の再ちいか
二字を呈せし人も有
未だ生死を離るべき
祈願あれども標なく
悲滅たもとを絞つゝ
讀給ふこそ賢けれ

そのたびごとに善導の
三返こそ見給へり
文にいたりて善導の
阿彌陀如來の兼て斯
其うれしき渡場み
げに道理と知れたり
みなうち捨て日々
流をひらき給へるは
そのとま善導來現し
印可證明なしたもふ
宗風扇揚したまふに

疏釋を拜見し給ふに
第八返のそのとまに
元意は察り得給へり
定おかせましたすと
船を得闇夜に燈火を
茲にいたりて忽ちに
六萬遍をぞ修し給ふ
承安五年の春のすゑ
專修念佛淨土宗
四明の洞を立いでし
靡かぬ草木も無り鳥

心とまれバ殊さらみ
一心專念彌陀號の
下機の吾等が得度は
不覺に落涙し給へり
得る心地との給へり
年らい所修の行法を
斯ふりすしく吉水の
御年四十三とかや
よく我意又叶へりと
花のみやこに入給ふ
ひらけ初にし蓮門に

入らせ給ふは後白河
上西修明の女院より
歸依爲るも數多也
月卿雲客おしなへて
熊谷津の戸宇津の宮
さて法中の渴仰は
難行易行を決擇し
自然悟道の密意こそ
げに格別の宗風ぞ
諸宗の學者も信伏し
般舟行道念佛し

高倉後鳥羽三朝の
後宮およそ残りなく
月輪殿下は殊になは
歸敬せられぬ方も無
世々目覺しき往生の
大原精舎も集會して
使人欣慕の教門の
却りて甚深漸妙なり
超過諸宗の法門と
有智の高僧悉く
形ちをみれば法然房

天子をはしめ奉つり
皇子親王もんせさの
佛のごとく歸し給ふ
或ひはたけき武士の
あどを示ぞ奇特なる
聖淨二門の論だんに
淺近なるに似れども
佛願他方の教綱の
無碍の智辨を施せば
みな門弟となり給ひ
實を思へば彌陀如來

智慧深遠の上人と
十方諸佛の證誠を
およそ本願念佛は
法燈無窮に照しけり
法華讀誦の道場に
龍神現じて守護を爲
すでに念佛三昧を
經書を照し給ひけり
頭に圓光あらはれて
淨土の莊嚴感見し
自證の掛る耳ならず

とひ々々隨喜讚歎す
今此寺にうつすやと
深意は大師製作の
未入淨土の初めより
普賢菩薩も來現し
眞言秘密の壇上も
成じて後の暗夜にも
月輪殿の庭上に
虚空を歩み給ひけり
をりく見佛乞給て
化他の利益も日に厚

聲山谷にみちくして
尊さ日んかたぞなき
選擇集よわらぬれて
一かたならぬ感應は
または華嚴の講席も
蓮寶羯磨あらはれき
御眸の光明に
地より離て蓮をふみ
まかのみならず面前
業事成辨きたまへり
なりもて往々思すも

天魔や競おこりけん
邊鄙の化度の年頃の
進む船出の行々も
斯てはどなき勅免の
夢の諭のあれなり
勝尾の峯のえら雲を
稱名感通あればにや
二祖對面のおん影の
是ぞ末世の不思議成
あくる睦月の始より
辨れなる哉現せしな

讒訴歎慮を驚ろかし
本意と知れども果ぬを
諸處の化益の類なき
佛法守護の諸天神
去と都も暫時のど
いの紫さと詠せしも
善導大師おらはれて
杉戸に移り給ひしが
つひに建曆元年の
日頃の不食増氣せり
わが往生の實よこれ

遠流の宣旨下るにも
おもへい是も朝恩と
跡こそ今に残りけり
今上および上皇に
柴の戸ばどの明暮に
此時なりと知れたり
法門相承したまへる
繪がくが如く殘けり
仲冬歸洛ましまして
こそぐ紫雲現しを
一切衆生の爲よして

念佛の信を取しむる
佛の來迎えめされさ
まかるに限の近き今
廿三日のおしたより
午の刻よいたりての
めしつゝ頭北面西に
音聲つきてやし後も
壽算八十のそれ耳か
まさに終よ近くして
一枚起請と世に號し
化縁華頂に盡ぬれど

瑞相なるぞとの給て
すべて野の年よりも
二根昔にひとしくて
廿五日の巳にいたり
御聲やうやく幽にて
光明遍照十方の
唇舌御名ようごくと
支干もともみ壬申の
勢觀房の懇請に
淨土の法寶末代の
朽ぬ滅後の徳たかく

まきりに歡喜念佛し
耳目不明に成り給ふ
長時不斷の稱名も
高聲無間體をせむ
慈覺大師の御袈裟を
文を稱へて化し給ふ
およそ十遍余りなり
世尊の滅よ符合せり
あらし給ふ遺訓の
安心起行の鏡みなり
後伏見帝の勅をえて

舜昌著述の傳記より
添つゝ全備しとかや
後白河の天皇の
後鳥羽の院の安藝國
今の世迄も残りけり
後嵯峨の院の勅宣の
天下上人無極の
後栢原の天皇の
繪命をこそたれ玉ふ
さらに元祿年中よ
勅會の儀式嚴命かに

伏見後伏見後二條の
勅修御傳と世に稱す
慧光菩薩と稱すべき
報福寺のそんゑいに
四條の帝の殊さらよ
通明國師とたまひ覺
道心者との贈り名は
光照大士と贈り名し
其だにあるを幾年の
圓光大師と贈號す
なほ東漸の二文字を

三朝天子の震翰も
さて御在世の其時に
勅詔ありと傳へけり
慧光佛との勅額の
華頂尊者と贈號し
後花園の天皇の
いと珍らしき褒賞ぞ
年々御忌を勤むへき
後盛なるひかりより
又五百年の御遠忌の
くわへ給ふぞ類なき

五百五十の御遠忌に
弘覺大師と給ひけり
斯御代々々の贈號を
滅後の今よ至るまで
末世の下機に應たる
祖恩を誰か知ざらん
願我慈悲無際限
● 黒谷上人和
歸命頂來黒谷の
花にたどきて朝貌の
譬浮世になからきて

慧成大師と追號し
和漢兩朝佛法を
蒙ふり給ひし例なし
都もわらやも總べて
選擇本願念佛の
誓到彌陀安養界
長時長劫報慈恩
圓光大師の教へには
露より脆き身を持て
樂しむ心に任すとも

六百年の御遠忌に
弘通の祖師も多れど
抑々在世の昔しより
大師の徳を仰ぐなり
易行の道を開かれし
還來穢國度人天
南无阿彌陀佛
人間めづか五十ねん
なせに後生を願ぬぞ
老も若さも妻も子も

後れ先だつ世の習ひ
つゝや二十の花盛り
直に頓死をするも有
哀はかなき吾等かな
けふの他人の葬禮し
おやこ兄弟夫婦ども
あら難有やあみだ佛

花も紅葉もひと盛り
世帯さかりの人々も
朝なに笑ひし稚兒も
娑婆日よく遠かり
明日の吾みの葬禮し
ささだつ人の追善し
南無阿彌陀佛

十や十五の蕾みはな
こよひ枕を傾むけて
暮よは煙と成るあり
死の年々に近づきて
是を思へばみな人に
念佛唱へて信すべし
(高僧の部法巻へ續く)

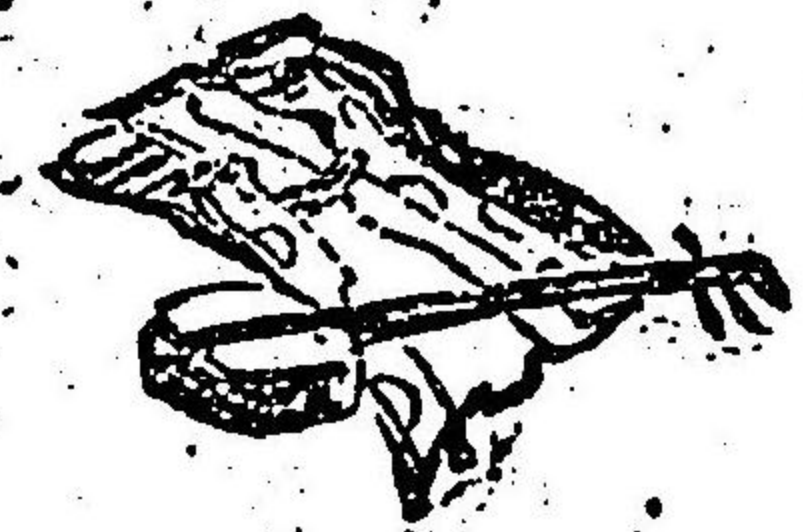
◎餘興オツベケベ一節

●天理 彩 業 治 オツベケベ一節

西川弘情居士

文明社會に害ある天理、これが見すて、をかりやふか、オツベケベ、

オツベケベツポー、オツポー、進取改良の世の中に、耶蘇教の
奇跡に同様な、社會に害ある天理教を、信する輩に學者はなひ、顔つ
さや大体青瓢たん、加之青ばな二本だし、左右のをてしに扇子もち、
三味線太鼓に浮されて、悪敷を抜いどうなりだし、踊る安房よ見る安
房、踊にや損ぢやと狂人が、踊りたその時や賑かな、お茶屋の二階よ
まけさいが、邪教を對治の神儒佛、三道一致の説きけば、
八百萬神ましますと、天理と名のつく神はなひ、そのうへ
尊が命やら、文字も判らぬ神なりと、さとりてみれば馬
鹿ラ子一、丸切天理の幽霊だ子一、幽霊にわらずバ、陰屁
だ子一、道理で臭氣の眞最中、神儒佛一致の麝香にて、憐れや天理も
メチャク、退治とやられチャたまらなひ、を止なさい邪教をば、オ



ツベケベオツベケベ、オツベケベツポ一ベツポツポ一、患者出來て
醫者呼ばず、懷妊になりても腹帯さす、産後にたべものゑらばなひ
そのうへ入浴も構はさひ、金米糠三粒で水のまし、感冒やチブスに變
じよが、虎列的ヒイヒイやりだそが、對岸火災視強氣だ子、患者の死
だる其時よ、信者が不平を唱れば、信心たらぬとぬけ口上、即坐の頓
智で誤魔化せば、頑固な親父は欺誑れよが、帝國固有の日本魂、神儒佛
一致の和樂時會、現れ出たる上からは、強氣な天理も大閉口、惡敷を拔
へと奏功がなひ、屋敷を賣拂ふ成すせ、お止なさい大人氣ナイ、耻と
知れ馬鹿ラシ子、今一つおまけにオツベケベオツベケベ、オツベケベ
ツポツベツポツポ一、

佛教和讚二百題佛の巻尾

和讚三百題特別廣告

○本書は菊形の中本にして全部三冊なり、壹部の正價
三十五錢にして郵税八錢也○十部以上購求の諸君の
左の割引す○十部以上一纏にして御買上の節の、正價の
壹割引○三十部以上壹割半引○五十部以上貳割引○百部
以上三割引○本書の佛、法、僧の三卷を以て全部とす、左
れども若し右三冊の内よて、或の佛の卷、又の僧の卷等
御望みの處あれば何れよても御求に應すべく候○一卷賣
は何れの卷にても十二錢五厘づつ○佛の卷よの因位和讚
を初め佛菩薩、經論歎、高僧碩徳の部類を載す、其數六十
余和讚、餘興として、天理退治のオツベケベ一節を載す○
法の卷には高僧碩徳の續き、黒谷上人和讚を初め修行安
心等の部類を載す其數四十九和讚に餘興として、てま利
節を載す○僧の卷にの施行和讚を初め雜の部六十八和讚
と餘興としてちよばくれ節を載す○書と言ふまてな
く佛教者の進物又は派出先への御購あらん事を

明治廿六年十二月廿日印刷
明治廿六年十二月廿日發行

愛知縣名古屋市門前町四百九十二番戶

編輯者 伊東洋一郎

同縣同市門前町十七番戶

發行者 三浦兼助

東京市麻布區飯倉町五丁目四十四番地

發行者 森江佐七

同 市京橋區三十間堀二丁目一番地

印刷者 染谷仙三

版權登錄

其中堂新版書目

○佛教通俗十七宗綱要(第二版)

大意 伊東蓮慈著 正價十五錢 郵稅二錢

「各宗の大意を極、わかり安く書きなせし書にて、佛教大意さも言ふべき……」

○通俗原人論講義

水野道秀著 正價廿五錢 郵稅四錢

「本書は原人論を頗る解し安き様論議せられしを筆記せしものなり」

○佛教和讚三百題

伊東蓮慈著 正價十五錢 郵稅四錢

「本書は地藏、觀音、血盆、苾芻、も七、鳴戸等の和讚を大集せしものなり」

○大乘洒落禪

石塚無佛著 正價十五錢 郵稅二錢

「本書は禪學の粹を面白かしく平かな文にて書きなせしものなり……」

○通俗佛教心理學

漢口雲根著 正價廿錢 郵稅四錢

「本書は唯識の初歩さも言ふ可き書也○唯識百法の圖と西洋心理と對照せしむ」

○標註日本佛法史

田嶋任天著 正價廿五錢 郵稅四錢

「本書は吾國へ佛教の渡來せしより明治廿一年迄の畧歴史」

○實際辯斥天理教

林金瑞著 正價十錢 郵稅二錢

「本書は彼の愚民を狂せしむる天理教を粉な微塵に攻撃せし書」

○佛耶耶蘇大敗北(再版)

梅原薫著 正價十五錢 郵稅二錢

「本書は實地傳導隊と自唱せし牧師等と討論して全勝を得たりし筆記なり」

○居士破邪金鑰

鬼頭祖調著

「本書は著者が多年歐米の神學士と討論して全勝を得られたる破邪書なり
正價十五錢 郵税二錢

○釋門記事論說

小林無爵著

「本書は佛教徒に欠く可からざる作文書なり尤も私用文も加へたり
正價廿四錢 郵税四錢

○標註心學一夕話

石塚無佛編

「本書は修身齊家の道を婦女子にも解し安き書
正價廿三錢 郵税六錢

○評註心學道の槩

石塚無佛編

「本書は修身齊家の道を婦女子にも解し安き書
正價二十錢 郵税六錢

○說教心の種(三版)

伊東蓮慈著

「本書は從來大本の三冊物なりしを今度鮮明なる
正價廿五錢 郵税四錢

「本書は讀んで面白きのみならず說教の材料とし
て古今無比の珍書なり

○說教心の種第二編

伊東蓮慈著

「本書は初編同様實に近世無比の說教の材料書なり
正價廿五錢 郵税四錢

○說教洒落囊

伊東蓮慈著

「本書は前二書の續編とも言ふべき至極面白き說
教の材料書なり
正價廿五錢 郵税四錢

○校正隨意說教

岸上恢嶺著

「本書は唯中策と同著者にして唯中策に優る事數
等なり夫れに標註を加へたり
正價拾錢 郵税二錢

○校註說教言々海

菅原智洞著

「本書は從來大本の三冊物なりしを今度鮮明なる
正價拾五錢 郵税四錢

活版に精刷し標註を加へたり

○校正人となる道

慈雲尊者述

「本書は四恩十善の大意を略述せしものにて說教
正價拾錢 郵税二錢
家に必讀の書にして……

○古今三大家說教

山田玄山著

「本書は岸上の隨意說教智洞の言々海慈雲尊者の
正價廿五錢 郵税四錢
人となる道を合併せしもの

○改良說教學

小澤吉行著

「右の各宗の說教法話の獨り稀古とも言ふ可き書
再版
正價廿四錢 郵税六錢

○佛教新說教

森實之著

「抑も本書を隨時進化の新說教なりと自負する所
正價廿錢 郵税四錢
以て言はば……

○發題說教の槩

小澤吉行著

「因縁說教の槩
正價廿錢 郵税四錢

「一冊の小冊子より百座、二百座の說教を思ふが
儘に述べ得らるゝ……

○西洋說教の槩

小澤吉行著

「最新なる西洋因縁を網羅して殘す處なく、君が
正價廿錢 郵税四錢
教理に合せ説きし書……

○佛教達辨の術

拈華蓮慈著

「これも又佛教演說の獨稀古、敵愾の演說に評註
正價拾錢 郵税二錢
を加へし書なり……

○佛教演說軌範

伊東蓮慈著

「一名佛教演說の獨稀古とも言ふ可き珍書なり
再版
正價拾五錢 郵税二錢

○滑稽佛教演說會

藤井東洋著

「滑稽演說の面白演說も坊様や居士方の内幕あ
再版
正價拾二錢 郵税二錢
みきり……

○全第二回

小澤吉行著 正價拾二錢郵稅二錢
「これは外教者の内幕……計りてはなぬ面白かしく佛教の眞理を述べたり」

○全第三回

小林無碍著 正價拾二錢郵稅二錢
「本書は初回二回の通り各大家の筆にありしものにて時弊を一々論難せしむ」

○一口僧侶の辨護

伊東蓮窓著 正價八錢 郵稅二錢
「坊僧方の至極都合のよき事ばかり書しもの……」

○佛教管長演説

伊東蓮窓著 正價拾五錢郵稅二錢
「各宗管長の卅六席の演説を編輯せし者にて佛教演説の標準とも言ふ可き書」

○佛教四恩の解

榎本道樹著 正價拾五錢郵稅二錢
「本書は四恩十善の大意を言文一致の筆を以て頗る解し安く記せし書」

○言文譬喻漫録

楠瑞録著 正價廿錢 郵稅四錢
「本書は和漢の群書より「たご」となるべき談柄を五百種蒐集せしものなり」

○眞假日蓮深密傳

伊東蓮窓著 正價廿錢 郵稅四錢
「來れ日蓮宗の信徒へ來れ來つて日蓮の人となり日蓮宗の組織を知れ」

○佛教滅亡論第三版

田島任天著 正價廿錢 郵稅二錢
「來れ、來つて一本を繕き吾が、佛教の將來を知れ……」

○佛教不滅亡論

萩倉夢笑著 正價廿錢 郵稅二錢
「來れ、來つて不滅亡論を一讀し吾が、佛教の將來を知れ……」

○通俗因明學(再版)

伊東蓮窓著 正價拾二錢郵稅二錢
「因明は印度の議論法なり本書は西洋の論理學と對照比較せし珍書なり……」

對照比較せし珍書なり……

○足立普明意見書

足立普明著 正價六錢 郵稅二錢
「師が滿腔の熱情を溢れて一編の意見書となれり宗教改良家の一讀せよ」

○尊皇奉佛大同團

小澤吉行著 正價拾錢 郵稅二錢
「大同團に對する各新聞の議論を網羅し、夫れに其者が意見を加へ評せし書」

○哲學大意(再版)

田島任天著 正價八錢 郵稅二錢
「哲學の初門……其大意を簡單に解し安く書きなせし珍書……」

○哲學論評(再版)

青江覺俊著 正價十錢 郵稅二錢
「哲學諸大學の演説を編集し、夫れに論評を加へたり……」

○哲學問答(再版)

田島任天著 正價十五錢郵稅二錢

「哲學の歴史哲學の要領とも言はん……」

○印度古代哲學

中島弘毅著 正價拾錢 郵稅二錢
「釋尊以前の印度の哲學、一名通俗金七十論とも言ふ可き書……」

○鹽頭俳諧秘事大全(再版)

松井鶴榮著 正價廿五錢郵稅四錢
「本書は發句俳諧の秘事口傳を惜し氣も無く書き記せしものなれば……」

○三十將某獨習新法(再版)

濱嶋瀧水稿 正價廿五錢郵稅六錢
「本書はわづか三十日間の修行にて初段以上に上達す新發明の習古本なり」

○通俗論理學(再版)

相良常雄著 正價二十錢郵稅四錢
「本書は論理の精奧即ち解し難たき箇所を總假名

を施しし懸篤に註記せし書也

○米商相場大全

開天居士著

正價五十錢郵稅六錢

「本書は相場に係る政府の更迭又は天象の變等一も漏らす記るせし書

○八木相場秘傳集

開天居士著

正價五十錢郵稅六錢

「本書は米商人の隙て心得居るべき寶買懸引の一
大秘密を記載せし書なり

○或間止啼錢(大本全三冊)

大珍禪師著 正價四十錢郵稅十錢

「本書は法華、般若、三部經等の大意を通俗にわが
り安く説きなせし書なり

○大藏却論(大本全三冊)

獨二道人輯 正價四十八錢郵稅十錢

「本書は一大藏經の内より珍説奇話を採萃し蒙求
の体裁に書きしもの

○般若心經忘算疏(大本全一冊)

黃泉禪師著

正價十五錢郵稅四錢

「本書は有名なる黃泉師が懸るにせられし心經の
注釋書なり

○般若心靜座談(半紙本全一冊)

如是庵主著

正價十錢郵稅六錢

「本書ハ平かなを以て頗るわかり安き様注釋せら
れしものなり

○首四大師注心經(大本全一冊)

山田大應著

正價十五錢郵稅四錢

「本書は道隆、支度、永覺、爲霖の四大家の注せら
れし一本をこせしものなり

○冠註信施論(大本全一冊)

至遊和尚著

正價十二錢郵稅二錢

「本書は故面山老師の原著に安齋院方丈の冠註修

訓を加えられし書なり

○龍頭証道歌(大本全一冊)

瀧 聽水著

正價十二錢郵稅二錢

「本書は瀧老師が懸篤に句讀及び訓點を訂正し尙
龍頭を加へられしものなり

○冠註佛遺教經(大本全一冊)

笠間龍跳著

正價十二錢郵稅二錢

「本書は東明本に依て頭書を添削し鼎山師の訓點
の誤謬を正せし書なり

○西國三御詠歌假名抄(半紙二冊)

小關泰法著

正價廿五錢郵稅四錢

「本書は御詠歌に傍註を加え又片假名文を以て古
人未發の注釋をなせし書

○一類珊瑚禪話(半紙二冊)

小坂井君著 正價廿五錢郵稅四錢
「本書は禪學の深甚微妙なる支理を滑稽の筆を以
て面白く書きなせしもの

○白隱假名律(半紙二冊)

白隱禪師著

正價廿五錢郵稅八錢

「本書は夜舟閑話、ホコリタノキ、辻談義、粉引歌
施行歌等を編輯せしもの

○禪海沙金集(中本二冊)

志摩道人著

正價十五錢郵稅四錢

「本書は禪偈を作る材料書にして雲納一日も欠く
可からざる良書なり

○百番御蘭の箋(半紙二ツ切)

一番より百番まで○一番十枚ツ、
にて千枚正價八十錢郵稅二十錢

○稻荷、地藏、觀音、弘法、聖天などに様にも都合
よくなり居候

○群雞一鶴(半紙本全一冊)

足立普明著 正價十五錢郵税四錢
「本書は普明師が熱源をそいいで耶蘇教を攻撃せられし活潑の書あり」

○高祖大師行狀曼茶羅略記(半紙一冊)

秀玉和七著 正價十二錢郵税二錢
「本書は弘法大師曼茶羅略記に説明せし書にて最も正確なる弘法一代記なり」

○御經類は大般若を初め各宗各派の講式等さしなる小經に至る迄數百種發賣仕候間御入用の品は御注文被下度候

○弊店の時々發賣書目を發行す○發賣書目よは數千の書物の正價及び郵税等を載す購書家諸君には欠く可からざる要書なり○發賣書目は無代價なれば何れにても郵税貳錢御送付も相成候へば速に送本可致候

